家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

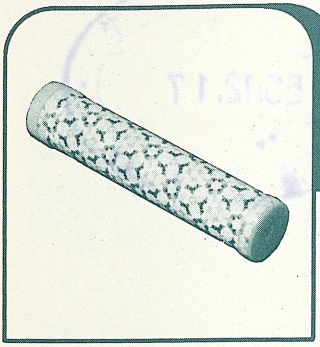
N24
75(1)
お茶の水女子大学
図書
50.12.17
附属図書館

お茶の水女子大学図書
和 昭51 98059
380 —37

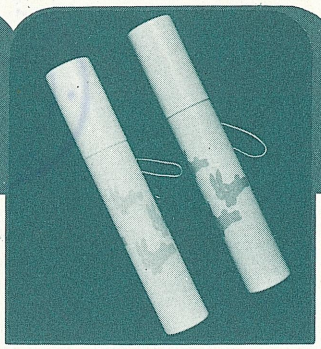
第七十五巻　第一号　日本幼稚園協会

1

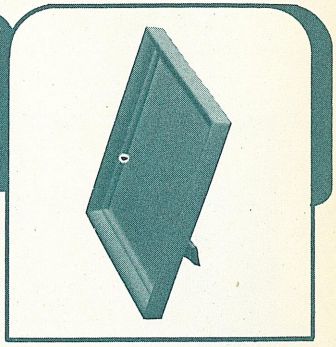
卒・入園記念品に最適です



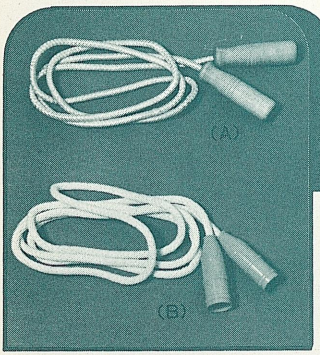
万華鏡　130円



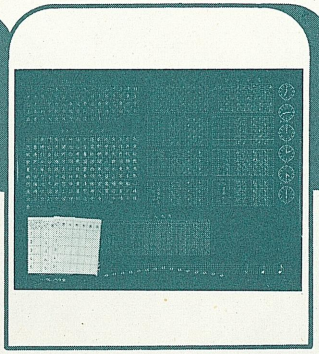
証書用筒（青・赤）各120円



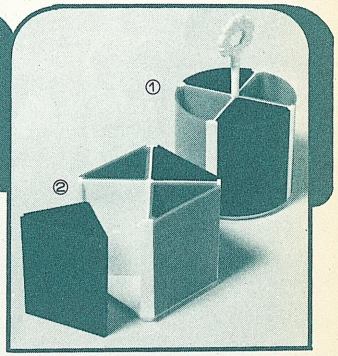
額縁　180円



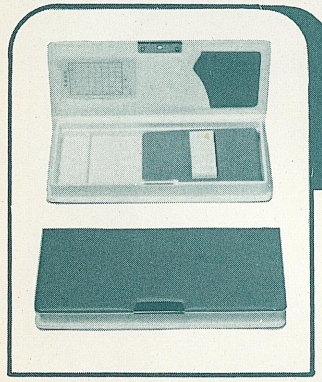
なわとび（A）　350円
（B）　220円



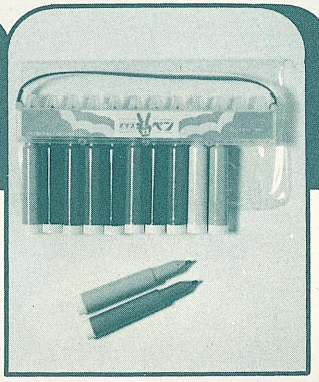
スタディーシート　330円



①スクウェアラック筆立　330円
②ラウンドラック筆立　400円



ふで入れ（青・桃）各400円



キンダーニューマーカー580円

キンダーノコール絵皿　600円
絵皿用紙50枚1組　170円

フレーベル館

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課　TEL　東京(03)292－7781(代)　にお問い合わせください。

幼児の教育

第七十五巻　第一号

幼児の教育　目次

——第七十五巻　一月号——

表紙　永瀬義郎
カット　中島英子

©1976
日本幼稚園協会

ほんとうのこと……棟方志功…(4)
棟方さん……田口恒夫…(19)
人でつづる保育史　白石トク先生をお訪ねして……赤間峰子…(21)
幼い日↔老年……神沢利子…(26)
私の幼児教育論 XIV……神沢良輔…(30)

私の保育　雪の日に……小泉庸子…(34)
初めての幼稚園見学……立川多恵子…(38)

「日本幼児保育史」研究余滴（一）……村山貞雄…(42)
アメリカの幼児教育の近状……勝部真長…(48)

「それぞれの子どもらしさを求めて」より（五）……(57)
子ども学のはじまり……津守　真…(60)

編集委員　勝部真長・守永英子
本田和子・関　治子
編集主任　津守　真・水田順子

ほんとうのこと

棟方志功

これは、お茶の水女子大学　家政学部　児童学科で、一九七三年　十二月一日になされた講演のテープを文字にしたものである。くり返しや、間投詞も多いが、できるだけ、語られた通りに記録してある。行を追って、ゆっくりと読んで頂けると、迫力が伝わると思う。

（津守記）

＊　＊　＊

（棟方先生　登場）

（黒板に絵をかきながら）ウーン、こないだね、あの、ぼく、北海道いったんですね。北海道、あの、北大……北大ですか。あそこには、ポプラの並木が、いいのあってね。油絵、あのー、かきたいと思っていったーですね。前に行った時よりも、時間の関係、時の関係が、とても、この、ひさんな感じだったんだもんね。ポプラが。とてもよかった、でしたね。そこまで行ったら、もっと、ひさんな所を見たいと思いましてね。さあ、北海道のひさんだっていうところ、どこだっていったら、そら、こーよね。ああ、それは、あのー、網走に行くがいいって。（笑い）おまえいってきたんかって言ったら、ないって。ぜったい、こんご、あそこは、あまり

いいことした人は入ってないんだよ。ハッハ。悪いことしなけりゃダメだよ。そうだって。じゃあ、ぼくなら、だいじょうぶだって、ボクね、悪いことばかりしてきたんだから、もう、ハッ。キップいらないやって。そういって、まあ、いったね。そして、ほんと好きだった。所長がドーゾっていうんだ。（笑い）まけたよ。ハハ。

なんも、ぼく、さびしくないんだ。（笑い）ひまわりが咲いていてね、その下の所に、ボク、好きなんだ、サンフラワーっていうのは。（笑い）ひまわりもとても良かったんだー。ひまわりって……（黒板にかく）あの、中川さん、よくかいていたけどね、あのー、ひまわりっていうの好きなの。とても好きなの、ボクは。そのー、なにかしら、ボクの心を惹くんだからなあ。字より絵の方が（笑い）早いんだね。ハハ、ボクね。ひまわりっていうね、字っていったら、ボクね。ひまわりっていうね、字っていったら、ボク、いつもかけないんだー。よくまちがえるんだ。ひまわりっていうの、こ、こ、こうですかー？　こうかいて、こう、こうかな？　（向日葵とかく）こうかくのかな？　わかんないね。どっちかわかんないけど、まあいいんだ。こんなもの、まちがったってね、ハハ。

山下清さんっていう、あのー、絵をかく方ありました。死にましたね。よく、あの、兵隊さんのこと好きで、大佐だとか、大尉、曹長、みんな覚えているの。

よく、あの、花火の絵が、とても上手でしたね。本当に、あの、花火の花、ホッ、あの、花火の、あのピカって光るひとつまで、みんなかくんだから。全部かくんだから。アーアー、アー、今度かいたの、一つ、あの、火が足りないって言ったそうだから。（笑い）ねえ。

そんな人が、ある時、宿屋へ、とま、泊りましたらね、そこの女中さんがね、「あの、先生、あの、先生は、お湯がね、あの、あったかいお湯、いいでしょうか。あの、ぬるい方が好きですか」っていったらね、「ちょうどいいのが、いいよって」いった。（笑い）まいったね。

ハハ、実際、ちょうどいいのが、いいですね。なかなか、そういえないものですよー。これはね、ちょうどいいのが、なかなかいえないですね。ウン。ちょうどいいっていうことは、一番いいことなんだけども、なかなか、思い切って、ちょうどいいっていうことは、言い切れないものです。それを、何気なくね。サラリとね。風流を味わうように、ねえ、ちょうどいいって言ったって、ねえー。

あの方は、知能的になにがしかということを言われた。それで、その、ある一点においては、ですね。もう、絶大な、立派さをもって、自分の一生をはっきりと生き尽くした、偉い人でありますね。こういう、絶妙な技巧をね、もてる人、もつ人、なんていうのは、ちょっと珍しいですねー。

でねー、あの、くり返しの話になりますけれど。ボクいったのは、その、網走の、あの、くどいようですが、あれは、あの、網走の刑務所ですよね。いったら、所長がむかえに出て、ドーゾっていうんですよ。(笑い)、ドーゾっていう(笑い)。ドーゾっていうんですよね。それでね、偉い人が、二人、三人ぐらいいてね、こんなにボク、ここへ歓迎されるかしらって、(笑い)へへ、言ったんですよ。やっ、だいじょうぶです、だいじょうぶですって。そしてね、まあ、迎えられていってね、よもやまの話して、やあー、土屋クンはね、ねえ、あの、ここへきたっていうからきたんですって。やあ、ボクも網走っていうところは、まだ、北海道は、そうですねー、仕事、きたけれど、まだ、網走までは来たことないから、今日はね、網走来たいってね、札幌から、まっすぐ来ましたって、外で挨拶しましてね。そして、そう、札幌で、海が見たいって、札幌じゃない、オホ、オホーツク海、を、見たいっていいましたら、いくらでも、ありますから、見てくれって。(笑い)話がいいよね。いくらでも、ありますから。いくらでも、ありますからみてくれって、ハハ、本当にね、本当にね、なんだー、ボウシ岩っていう岩がありましてね。(黒板にかく)

あの、これねえ、あのねー、あのー、オホーツク海だというんですよ。氷がねえ、もうあるんじゃない? 氷がねー。こんなに、岩があるのよ。こんな岩だったなー。ウーン、こういう岩、一つありました。とても、まあ、いい、あのー、景色でありました。ボク好き。筆……持っていきましてね、かいてきましたが。

そして、こんど、そこで、色々、景色みて、かいて、刑務所に、また、入所しましてね、(笑い)、今度、又、お茶をのんで、あのー、いろいろ話して、そしたらね、あの帰り、「どうもおじゃましました」っていったら、「またドウゾいらっしゃい」って(笑い)言われましてね、よく見ました。

見たいって思うものね、見るっていうことはね、さっぱりするね。なにか、こう、借金したものをね、パッとね、こう

払った、払ったような気がして、いいものですよ。ウン、なんだかねー、あのー、見たいとか、聴きたいとか、思うことが果せない時は、なにか、重苦しいよね、背中全体がね、なんだか重い。責めているようで、冷たい汗があるようで、汗ばんで、イヤなもんだ。さっぱりしましたな。

そして、今度、えー、ここ出たらね、あのー赤レンガですよ、ああいうところはね、みんな。赤レンガで、またー、この色がいいんだ。赤レンガの色がね。なんともいえない、きれいな色。きれいったって、ねえ、色だから、まっかできれいとか、いうわけじゃないの。もうー、そのー、そうだなあー、妙な色なんだ。フフンフフフ……。

妙なんていう言葉ね、不思議じゃないですか妙だって。あの人は妙な人だなとか、妙な女の人だよとか、妙なこというんだとかって。人間っていうものね、……にできているんだよ。わからないことになると、妙だとかっていいますね。不思議だよ、ね。妙なんて。妙なんだとかいうのは、おもしろい言葉だと思う。

で、日本人だけかな？　ヨーロッパあたりにもあるかな？妙っていうこと。ねえ、私は、しらないけれども。また、それに、妙だっていうの、日本じゃ、妙だとか、雅だとかいいます。雅は、わかりますよねえ。みやびやかっていう字じゃないですか、あの雅・雅っていうの、この字でしょ（と黒板にかく）……とか、しぶいとかね。もうちょっとーちょっとこうー、そういうようなことばに、粋っていうような言葉、なあ、粋っていうことば、あります。ーね、粋人とかね。本当に粋なっていうか。それから、あのー、もっともっと変だと、風流な人だとかっていうことば、の人がありますよ。あれは、風流人だと。風流、なんていうことば、たいへんですよ。もう、最高でしょうな。あらゆる人間の感情、を、こうー、きらめくようにね、生かして、それを、もう一歩ね、なんとも言えない、このーまあ、芭蕉のことばでいえば、「……にあずかった」思い、を、何気なく、さりげなく、こうーね、サバサバってね、流していけるような、風情、ですかね、なさけ、っていうか、情っていうか、ねぇ。情とかなさけっていえば、なにか、しめっぽくてね、涙っぽくて、めめしいけども、風流っていうのは、それを、そういうことはない。なんともいえない、こう、まあ、こうね、結城の着物を十年くらい着て、それを、洗たく、なん回か、なん回かして、そして、こう、着せるような感じじゃないでしょうか、ねえ。別に光りもしない、ねえ。また、木綿のように、ゴツ

ゴツもしない。こう、何かとつとつとした中に、何ともいえない。この、……光と、おだやかな世界を、あの一枚のきものの中に含ましているっていうのは、やっぱり、結城なんていうのは、それを思うには勇気がいりますよね。（笑い）フフ、本当。ハハ。

まあ、そういう世界、ああいう世界が、粋とかいうんじゃ、ないでしょうか。ねえ。

女の世界を表わすのも、粋とか、あでとかね、雅とか、あるでしょうね。いろいろに、そのー、そういう、この一気持ちの高いとか、低いとか、っていう、高低、に、関係のない、この……世界っていうのは、非常に大事な世界ですね。

これが、やはり、まあ、いいたくないことばだけど、美っていう、ものとか、もう一歩いいたくない、芸術なんていうことばありますが、そういう世界と……言えるんじゃないですかね。

風流って、やっぱり、いいですなあ。

もう、やっぱり、人間の、思いっていう、ものを、このー、知らずしらずにね、不識なうちに、……していく、一番きれいな世界っていうのは、風流じゃないでしょうか。そういう思いの中に、この、身をつつませ、思いを募らせ、自分のかいていったものをですね、その中に、このー、そうねー、遊ばせる、っていうこと、でしょうな。これが、大事、へへへ、で、ですね。ハア。

まあ、ものというものはねえ、どう考えたってね、考え、つかない、穴があるんですよ。穴がね。その、考え、考えの、めっぽうな、中にある、穴こそ、やっぱり、非常に大事なこと、なんですね。

仕事、なんていうのは、そういう、もんでしょ。

まあ、私は、前に、そういうこと、云ったかもしれませんけれども、事につかえるということが、仕事ですからね。事をしている、のが、仕事じゃないですよ。やっぱり、仕えるっていうことが大事ですね。

大事っていうことも、大事なんだー。ハハ。大事っていうこと、言います。大切なんていうことはいいますね。大切なんて、なんのことだかわからない、ぼくも。大事は、ほら、大きくかくっていうか、なんか、ほら、こうーねえしますけど、大切なんていうことば、わかりませんよ、ぼくだって。ぼくだって、じゃ、ぼくだって、ぼく偉いようだけど、（笑

い）そうじゃないんだ。そりゃまちがい、ぼくの。不徳の……。（笑い）

大切っていうことば、ぼく、いいねー。なんだか、わからないけどいいんだ。これ、わかってしまえばよくない。

さっきも、ちょっと、あの、あそこの、控えの部屋で、お茶、の話をちょっとしたんだー田口先生と。あの、大切なっていう気持ちをね、形であらわしたのが、やっぱりお茶でしょ。ああいう、初めからねえ、終わりまでの、約、懐石を入れて、二時間半位の、時間の、尊い時間。呼吸の、がっちり、した、挙動の美、っていうあり方の世界、っていうもの。非常にこう大切な、っていうことなんですよ。

大切っていう字は、大きいっていう字に、切るって書くんですよね。（と黒板にかく）切る。なんだかわからない、切るっていうのは。けれどもね、切れが大切だっていうこと言いますよ。よくいいます。切れが大切だっていうこと。そういうこと、だと思うんだね。きれがよくないっていうこと、切れをよくすること、切れを、本当に、立派にすること、が、大切っていう意味、じゃなかろうかと、私の足りないお目から、そう、まあね、判断しているわけですが、そういう大切さ、こと、切れ、切れのいいこと、なんのことでも、そういうことが、あるでしょう。くどいようなことでもね、たまるようなことでも、あふれるようなことでもね、それを、切れがよくすること、が、大切なんて、なんのことでも、そうでしょ。ねえ、料理だって、そうでしょ。切れが良くないと、いい味、なりませんねー。

酒の味をしるときは、飲んでしまわないそうですね、きき酒っていうのは。何百本もある酒を、わかるんだって、その道の人は。ダメ、へへ、前にでてるの、あれ、全部のんじまったらだめなんだって、ね。ぼくの妻、きいてね、（笑い）「それじゃ、二～三本のんで酔っぱらっちまいますよ」（笑い）きき酒でー、おもしろいね。のどに入れてきくんだから。ウウン、香なんていうのも、そうでしょ。鼻で、かんでて、きく、なんていうことというでしょ。味をーきく、香をきく、ね。

お茶を飲む、じゃなくて、お茶を喫するとかいいますけど。それが、結局、大切なことを、一番意味するんですね。苦くなっちゃっちゃもうだめなんだね。やっぱり、そのー、舌でもって、ほおをこがすような味、でないと、茶がうまくない。せん茶、玉露などね。それを、パッと切るところに、この、味の醍醐味があるんじゃないでしょうか。ですから、こ

の、切るっていうことは、非常に大切……。

この、こないだボクは、油絵をみせた会、ありました。そしたら、ある人が、「棟方の油絵は、筆を二度使っていないな」っていうんですよ。とってもよく当ったことばなんです。ボク、二度筆使わないんですよ。

いっかい、油絵というものは、ヨーロッパから勉強した手法はね、二度つけても、三度つけても、いいんですよ。なすって、なすって、なすって、形を把握するんですもの、なあ。これ、ヨーロッパのゆき方、技法ね。

セザ、セザンヌが、りんごの丸さまで、これ話だろうけど、りんごの丸さまで、絵の具盛ったっていう話、ありますね。セザンヌが。

けれども私、日本のね、油絵、やっぱり油絵だってね、やっぱり西洋から来た油絵の手法と、日本から生まれてくる油絵の手法と、ちがうと思います。私はね。私はやっぱり、油絵、日本画なんですよ、結局ね。日本から生まれたもんですから。油絵、でも、日本画なんですよ、材料が違うだけですね。

で、どうも、あの、ぼくは、絵かいていると、この、パパーッですね。パパだからパパっていうのかな？　（笑い）パパッてこうかく、あの、切れがね、あの、なんともいえないんですよね。本当に何ともいえない感じ。色っぽい、驚ろき、なんですね。切れがいい、大切、なるほど、大切っていうことばの、そのいみあいがね、仕事してると、わかってきます。事に仕えていると、わかる。事に仕えないと、それが、こないです、やっぱりねー。本当に、その大切っていうことは、実に、大切なことですね。何でもないことですよねー。

切るっていう、これぐらい大切なことはないよ、日本のことばの中で。これを、あれではどういうこと言っていますかな？　皆さん勉強している方ばっかりだから、おわかりでしょうけど、いわゆる辞書とかああいうものではね、どうかいているかな？　大切ってね。ぼくまだ読んでないからね。あの、辞書を持ってないわけでないけど、見てないんだ。

大いに切るっていうんだ。大切っていうことに、こだわっているわけでないけど、やっぱりこだわりたくなるよね。ウン。これに、こだわらなくなればいいんだ。本物なんだ。本物になれないところで、ボクがあって、本物でないところに

棟方がいて、本物でないところに棟方志功があるってことだな。へへ、本物に、実際ね。

こないだね、あのー東大寺、行ってきました。あのー、東大寺、行きましてね、あそこの管長は、上司海雲っていう方、いい方でしたな、とても、いい方でした。東大寺の、今度、あのー、大仏殿をね、補修するそうですよ。なおすんだって。そうすれば、あれがまた見られなくなるから、その前に一回行こうと思いましてね。行って来たんですよ。

エートね、ウーン、ちょうどね、あれが、また、あの、ぼくが行く、その日がね。……僧正の、あの、唐から来た、唐渡りのぼうさんですが、その方の、千二百年の、ちょうど、その記念日だったんですね。いいところへ行きましてねー、すごいものでしたよ。普段ね、あの墨染めの、あの衣きて、こう……すごいんだ。もう、なんていうんだか、もう、あきれるくらいきれいな着物きてね、いるんだ。本当に、あきれたもんだ、もうー、ほんとに、おどろきました。もう、千二百年も見てきた、フンフン、わけでも、ないけれど、良かった。立派でねー。きれいでした。こういう夜は、こうこう……こういうね（と黒板に絵をかく）あー、いいんだ。それが麻、麻ですよね。白い麻で、白いね、薄い麻で、もう一回白いの、こう、上に着てるんだ。ここだけが、白くみえるんだ。これがなんともね。金欄どんすのね、いや、金欄どんすじゃない、きんらんの、あの、衣を着た人もいましたけど、こういう人、二、三人いました。とっても、いいんだ。

ボクがね、奈良にね、去年いた、桜井っていう町、ありましてね、町といっても、あそこ、市でしょ。そして、あそこに、万葉百人っていうね、あの、（黒板にかく）万葉百人の詩、詩をね、書いたんだ。小さいんだ。こんなのあるね、貝の、こんなのある。それで、あの、万葉うたった天皇から、そのほかの人々、大勢のを、百人の人のうたを、ですね、現代の、人たちに書かせて、それを、やまのべの道ってね、ご存知でしょ、そのやまのべの道に、ずっと、こう、立てました。私のもねー、あるんだ。

それで、あの、あそこは、なんだっけ、あらし川っていう川あるの。（と黒板にかく）あらし川っていう川あってね、そこが、ちょうど、あらし川なんとかかんとかっていう、なんとかかんとかってことないでしょ、家持（やかもち）だから、家持じゃない、人、人麻呂（ひとまろ）だから、ね。人麻呂のうたなんですよ。そ

れをね、あの、ほった、ぼくの字でほったのね、ありました。ちょうどいい時で、今ね、柿がとてもよく色づいていました、柿がね。それから、みかんもなっていました。ちょうど、その碑のね、そば、うん、そのあらし川っていう、今もやっぱりあるいてる、んじゃないな、流れてるのよ。うんうん、その川がね、水が流れてるのよ。とても、きれいな、音して、きれいな流れ、きれい。実に良かったですね。見えるようだなあ。川が流れているな。きれいな水ですよね。ちょうどその辺。

今、奈良の、その東大寺、と、あらし川のその碑を見て、それから……そこを、この、歩いて、それで、帰りましたけどね。

そのー、話が返るけどね、今の海雲がね、どうも人のことを呼び捨てにする悪い癖ですな、上司海雲先生です。それで、それで、ぼくは、棟方だって、棟方っていったって（笑い）ムっていったって、棟っていったって、何も怒りませんよ。ぼくは、余り、さんとかなんとか言われるの、がらに合わないもんな。だって、今、皆さんだって、まあ、一番偉人をさして、まあ、神武天皇さんなんていわないでしょ。神武天皇っていうでしょう。楠木正成様なんていわないでしょ。楠木正成、なんてね。ウン、明智光秀とか、いうでしょ。それと同じ、さんっていわれるの、まだ、偉くないんですよ。（笑い）さん、つけられなくなるように、ならなければ、ダメ、人は。ウン。梅原竜三郎って言われないと、梅原は、偉そうに見られないね。梅原さん、なんていったって、（笑い）、鉄斎さんなんてね。志功、っていえばね、何だか、偉そうに、偉くなくても、偉そうにきこえるよね。志功！　棟方！本人は偉くなくても、偉そうにきこえます。梅原！　っていった方がねー。

けれども、現在生きている人は、どうも、そういうと、あれは、呼びすてにした、なんてね、いうよ。うそつきだなあ。生きてるのは、きちがいだ、みんな、ウン。生きてる人本当にけちくさい話で、おもしろい話、あるねえ。ウフフ、本当よ。

あの、そうだ、けちくさい話、しよう。これも、前に、話しましたが、まあ、いいよね。この際、話しとったって、いいよ、どうせ、ね。そのー、物のわかんないのが、しゃべるんだから。ね、うん。

東大寺、の、あのー、は、毘盧遮那仏ですね。真言宗のシンボルは。毘盧遮那仏、るしゃな仏っていうのかなあ。書けないね。（と黒板に書こうとする）確かねー、辞書にもありますよ。びるしゃな仏ね。

この、るしゃな仏をね、昔から、毎月一回、掃除するそうです。あの、和尚さん方が、はちまきをしてね、うん、そしてもう、手のひらに上がったりね、どっか、あのー、まぶたへ、こう、上ったりしてね、こう、ほうきで、こう、ごみをとるんですよね。

たまたま、鼻の穴を、こうやったんだって、それも、ほうきでね、こう。鼻の穴、直径三十センチなんぼなんていうんですから、すごいよねえ。ほんとにすごい。「おい、なんでおれを、こういうふうに、この、ほうきなんかで払うんだ。毎年……」「ごみがついて、むさ苦しくなっているから、それを払わなければならないので、一年に一回十二月何日って、決まっているのですよ。ですから、わるく思わないで下さい」うん、っていったら、「そうじ？　ハー、お前たち、そうじ、そうじっていったって、ぼくの、その体だけを仏だと思っているのか。この、ちり、このたまっているちり、も、仏陀だ」って、言ったそうですよ。ちりも仏っていうんです、それをね。（黒板にかく）、ただ、この、体にできた大仏だけをね、仏だと思って、おがんで、お経をあげて、ありがたがる、かたじけながる。それじゃ、本当の宗教をしらないということを、大仏が、そのぼうずに言ったらしいんですね。「この、何、億の、何千、億の、このゴミ、これをね、仏と、見るのが、あなた方の商売じゃないか。素人の場合は仕方ない。けれども、あなた方は、これで飯くっているんじゃないか。それが、この、ちりを仏とみえないっていうことは、なんーという、ふとどきなヤツか」っていうことを、仏はね、教えたそうですよ。

ちりも仏、を、しらないで、仏を念ずる、っていうバカ、ほどね、無法だって、いうことですよね。法がない。法がないっていうことですね。ゴミをね、ちりを、一つのチリを一つの仏、それを何万の仏にみる心が、あること、ね、有法なことなんですね。（黒板にかく）そのチリをね、仏に、みることこそ、本当の信心じゃないか、っていうことを、大仏が、教えたっていうことですね。

偉い偉い坊さんが、最も、大切な、ことを、ひとことで教えて下さいっていいましたら、「赤子の念ぶつ」が大切だっていったそうですよ。「赤子の念仏は良きなり」って、「赤子

の念仏は、いーよ」って言ったそうですよ。

その言葉は、やっぱり、勉強、から生まれた知識じゃ、ダメだっていうことですね。信心ができていない、っていうことですよ。赤ん坊のように、なにしても、わめいて、泣いて、もう、すべて、そういう自分の本当の信心をね、表現するのに、ないてわめいているところに、本当の宗教もあり、信心もあり、更に高くした点もありっていうことを言った、和尚さんが、ありましたね。

こういうこと、なんじゃないですか。なんでもかんでも。知識じゃない、世界こそ、現代の、この世の中に、最も大切な、世界、っていうこと、ですね。いや知識、ないっていうことは否定していませんけどねー、私も、そのことをきいて。それなら、バカがいいかっていえば、それはダメでしょう。やっぱりね、光るように、輝くように、あふれるように、世界をおおう、大きい大世界こそ、やはり、このー、本当のことなんですよ。

本当のことというのは、やっぱり、その知識を、一応ね、味わった、知った上での、赤ん坊になる、っていうことが大切、だっていうことを、言ったんじゃないでしょうか。いっくら、山ほど、海ほどある知識も、赤ん坊、赤ん坊の声のように、熱心に吐き出す世界こそ、そこに、しんみょうの……てつがあるっていうか、悟りっていう世界が……。

そういう大切さこそ、大事な世界だっていうことを、私は、今まで、こうしてしゃべっていながらですねー、そういうところへ、から、出発して、そういうところへ帰って、くる話が必然の、必然だっていうことを、覚えましたね。

いわゆる、一番、冒頭にしゃべったように、網走の刑務所、いったら、よーこそいらっしゃいました、また、帰る時、またドーゾおいで下さいって、いったと同じように、私、今まで、こうしてしゃべったことも、帰るときは、よういらっしゃいました。また帰る時には、またドーゾいらっしゃいっていうことばで、迎えてもらって、そういうことばで、帰っていきたいと思います。それは、ただ、人の、思い、や、世界だけでなく、あらゆる対面の、世界の中に、そういう大切なものが、ひそまれて、無尽蔵に、ある。そういうことすることは、やっぱり、物を感じて驚く、いうことですね。前にもふれた通り。

それから、何といっても、ぼくは、やっぱり驚くことと、

喜ぶことと、一番めんどうな悲しむこと、これがとっても、人間の三感のうちで、もっとも、大事なことは、悲しむことでしょう。

おどろくことと、よろこぶことは、こりゃなかなか、だれでもできますけれど、悲しむっていうことは、泣くっていうことは、なかなか、だいたい人でも、できがたいそうです。偉い、偉い、偉い、もう、人が、泣いちゃダメだっていうことを、最後にいって……の中に入ったっていいますね。人間は泣くもんじゃない。もう、あふれる涙が落ちるけれども、落ちないところで声出さない心で止まるっていうことの大切さ、大いに、どう、それを、きっていくかということの、心の思いをですね、我々大事にしていただきたいと思います。どうも。(拍子)

＊　＊　＊

――これから質問にはいる。

松村康平「先日、テレビで、化けるというお話を伺って、感動したのですが、そのことを、ここでも話して下さいませんか」

北斎の浪裏っていう、あの、絵があるんだー。あの、それで、この浪裏っていうのはねぇ、あの、こうなってこうなって、浪の裏でねぇ、ここは、こうなっているんだー。(浪の絵をかく)こういうのが、この浪の鉄砲がね、ほんとうにね、海の浪よりも、本当の浪なんだ。こっちの方がね、絵の方が、北斎の浪の方がね。この浪にはね、驚いたの。この浪が、浪を背負って、又、背負って、又、浪を背負っているの。本当に、不思議なくらい、この、えー、本当の浪でしたね。そして、その浪ー、北斎の浪は、本当の浪なんだ。本当の浪なんだ。こっちの方が。

こういうことでないと、ぼくはね、絵っていうもんじゃないと思うの。ただね、こうー、ここにかいていたってね、絵じゃないですよ。

よく、あの、美術学校へ行くと、デッサンデッサンいうけどね、デッサンっていうのは、デかいて、ツかいて、サかいて、ンなんだよ。それだけよ、うん、ねぇー。ほんとにね、この、なんだ、デッサンっていうものは、本当の人間のね、体の皮とか、肉とか、そして、骨までね、見なくちゃ、とどかなくてはね、デッサンじゃないですよ。デッサン、デッサンなんていっている人は、……なんだ。ぼく、だから、こな

いだ、言ったの。

あの、北斎をね、奇人だっていうんですよ。奇な人ですな。黄色じゃないのよ。（と黒板にかく。笑い）どの位奇人かな、ぼくなんか。あまり大きくないんだ。奇人っていう人が、よっぽど奇人で、えー、北斎とかぼくなんか、とても、まともですよ、フフン、ほーんとに、まともだ、あーあ。それは、なぜかっていったらね、その、自然を相手にしてないから、奇人のようにみえるんですよ。いや、そんなこと、本当、大きなこといって悪いですけど。筆もつからね、そうなるの、ぼくは。今日、チョークだから、そうならないけど、これが筆だったら、筆を、こうもったね、もう、ぼくは、ぼくじゃないの。奇人じゃないの、まともですよ。あーあ、本当に。だから、奇人なんて、筆もてば奇人なんていうの、大バカですよ、大まちがいですよね、あーん。ひねくれたもんだ、その人は。こっちは、素直なんだから。もう、まるで素直で、大変なんだ。（笑い）

それがね、化ければ、大変なことになるんですよ。それが、私がよくいう、化けるっていうことですよ。

さっき、来る車の中で、ぼくの油絵がいいって、ほめてくれましたよ。ぼくは、うれしかったんだー。うん、とても、うれしかったんだ。ぼくの油絵をいいってね、ほめてくれる人がある、っていうことね。ぼくの油絵、二度筆使わないんだ。ヨーロッパから伝達された技法っていうのは、二度筆、三度筆、四度筆、五度筆、筆がいっぱい、いっぱい、いっぱいつくんだ。けども、私ー、の、油絵っていうのは、二度筆ないんですから。本当にね、これだ、と信じたものを、化けさせたいから、ぼく、二度筆、使わないんですよ。二度筆使うと化けがなくなってしまう、化け、たじゃなくて、あの、もう……になってしまうからね、二度筆使わないですね。その、ゴッホなども、その、あのヴァン・ゴッホね、あの人も、二度筆ないですよ。ヴァン・ゴッホの、みてますとね、木の遠近がね、遠いところと近いところが、見ている遠いところと近いところよりも、更に空間をね、通した、そのー、いわゆるこの、人間の感情を、大きくこのアレンジさせてね、化け物のような世界がね、あの絵を作っているんですよ。

まあ、あの、ベートーヴェンっていう作曲家、ねえ、ぼくよりも、まずい顔だけどね。（笑い）ぼくも、よっぽどまずいけど、あの人もっとまずいよね。（笑い）

あの人の曲が、一から九まであります、シンフォニーが

ね。ぼく、好きなんだ。（と第九のハミングをする）そこまで。（笑い）それほど、いいんだ。あれだってね、やっぱり化けているんですよ。ただ、曲をね、こう、書くとかなんとかって言うもんじゃないんですよ。もう、あのね、曲をね、もう一歩ね、上ずったもんですよ。上ずったっていうことは、ベートーヴェンの、生命をね、もっとからからしたものから、あの、独唱曲ができていますね。あそこだけは、やっぱり何十年、何十年じゃない、何百年たっても、ベートーヴェンの曲じゃないですか。いや、クラッシックだって、バカにしたもんもあるでしょうよ。

やっぱり、その人だって、やっぱり、カラヤンの指揮でね、こうね、こうー、やってね、こうやるのいいじゃないですか。ね、ああ。あの、イタリーのテノールと、それから、あのイタリーのアルト、じゃない、あの、あの、なんだ、そら、ソプラノと、アルトと、ねえ、バリトンとバスと、いいじゃないですか。大きくなって、広くなって、次々、次々と大きくなるんじゃないですか、ねえ。こうね、こうね。（と黒板にかく）これが主題を作るんだ、これ、音楽の、化けものというものがあると思う、私は。そういうことに、ぼくは、ものは化けないとダメだっていうこと、いいますねー。

私はね、あのー、美術学校で、今、よく、あの、教えてると、いいますよ。一番下手なのは、美術学校の先生だっていうことを、よくいいます。（笑い）うん、けれども、それが一番上手なんだ。一番上手だから、一番ダメなんですよ、それがね。で、まして、絵かきで、立派な絵かきさんっていうのは、みんなヘタですよ。梅原だって、梅原さんじゃない、梅原！　（笑い）だってね、鉄斎だって、ねえ、鎌倉の絵巻きをかいた人だって、桃山の屏風をかいた人だって、ヘタクソ、うそばかりかいてるよ。うそ、うそばっち。うん。木のてっぺんに葉がついたりね、楠の木に花の枝をつけたり。あれはなぜかっていえば、上手な技法っていうよりも、真実な、それも、さっきの、浪じゃないけれども、松なら松のね、木よりも、更に化けさした、真実を表現、しようと思うには、どーしても、ある技法をとらなけりゃならないところにね、上手なそのやり方のその人には、できないんですよ。

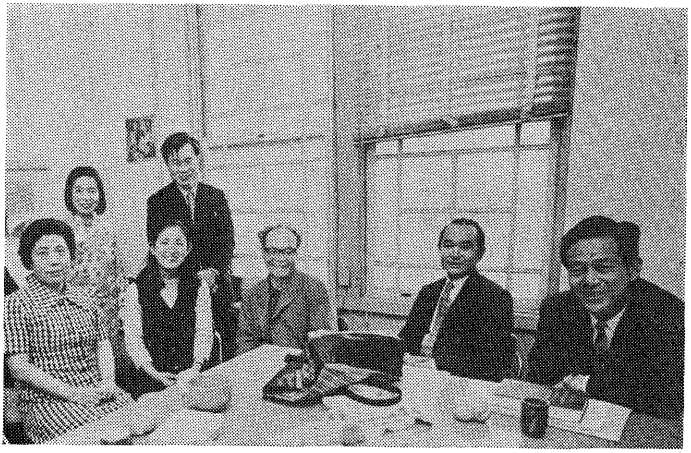
ぼくが化けてかくから、化けているだけのことをそこに表現するから、その買う人が、化け代を払うって、いう、ことでしょう、きっと。だからぼくは、化けるっていうことは、非常に大切だし、上手っていうよりも、下手だっていうことはねぇー、立派だっていうことですよ。上手っていうこと

は、それ以上に何にもないもん。上手だっていうことは、立派になるっていうことですよ。立派なのといいのと違うのですよ。いいとか、おもしろいとかっていうこと、よくいいます。

おもしろいなんていうことよくいいます、が、や、おもろさっていう、あらおもしろい、あらたのしい、って、……だと思います。面が白いんだからね。（笑い）あの、字引き、また字引き出すけど、字引きを引いて、おもしろいっていうの、あらおもしろい、あの、あらおもしろい、たのしい、あんなさえきって。冴えきるっていうことも、いいことばだね。

冴えきるっていったけど、あれは、やっぱりね、おもしろいとかいうことばより、よりももっとね、大きい、ちがい。それは、やっぱり、事をね、おもしろさを、一回化けるっていうところに、その一、立派っていう字があるんですよね。初めは立つっていうんだ、これもね。立派っていう字は、初め立つっていうんだ！。これは、また、たいしたことばでしょ。また、いずれの機会でね。あの、今の、六時から始まっているけど、九ちゃんの、あの、里見八犬伝じゃないけども、いずれ、このあとで、ハハハ。（笑い）

講演がおわって談笑のひとときを



前列右より，田口恒夫，森田宗一，棟方志功
後列右より，津守　真，本田和子の諸先生方

棟方さん

田口恒夫

棟方さんは版画家です。ところがその版画の本当の良さが私にはよくわかりません。ですから棟方さんについて語る資格はないのですが、人としての棟方さんには、たいへん強く引きつけられ、その人柄や考え方、感じ方には深い影響を受けました。

何年か前、文化勲章を受けられた時、NHKの「青少年を考える」というラジオ番組でアナウンサーと対談しておられるのを聞いたのが、私にとっては、棟方さんという人との初めの出会いでした。そのお話に感動しそれからもう百回以上も繰返しその録音を聞きました。その後ご縁があって個人的にも何回かお会いしましたし、〝非常勤講師〟になっていただいて講義をしていただくこともできました。

棟方さんは少年時代から、自然の中の本当の美しさに心をゆさぶられる思いがしておられたようです。それは我々が普通に言う〝美〟とか〝芸術〟などというものを越えた、なにか魂のいぶきのようなものを感じさせます。

若いころいつも写生をしに行っていた公園についてこんなふうに言っています。

「あやめが咲いたり、オモダカが咲いたり、ねえ、藤の花が咲いたり、とってもきれいな景色でした。もとの合浦公園というのは、……もう海は真青で、砂地でねえ、松がきれいだし、八甲田山がきれいだしね、もうパラダイスでしたねえ。何ひとつ悪いものはありません。何ひとついいものばかり。ねえ。ですから、ひとりでにやっぱり、気もちが大きく、太く、ねえ、深く、幅広く、立派に、位高く、なるのは当りまえですものねえ、はあ。細いものはひとつもありませんものねぇ。太る、大きい、幅広い、そういうものばかりですものねぇ」

私は児童学を学ぶ者のひとりとして、いったいどのようにしたら、今日の子どもたちに、このような〝感動する心〟を育てることができ、美しさと真実に感ずることのできるおとなになってもらえるものかと考えさせられます。

棟方さんは小さいときから、自分自身の中に、なにかかけがえもなく尊いものがあることを感じていたようです。絵を

描くようになった動機について、こんなことを言っています。

「なにかねぇ、風のようか、波のようかね、雨のようか、嵐のようか、雷のようかね、そういうものが、グルグルグルグル行ったり来たりしていた思いが、体の中にはいっていましたねぇ……」そして、そういう思いに駆られて仕事を続けて来たといいます。

もちろん貧乏でした。「たでしね、私はね、その、苦労をね、苦労と思いませんでした。うん。ま、苦労ではあったけれども、僕はねぇ、みじめだと自分を思ったことないですよ。まあ、いくら貧乏してもねえ。飯食えないとき、何度もありました。もう何度もありました。もうご飯も食えない、焼き芋も食えないとき、ありました。……それでも僕はねえ、〝おれはみじめだ〟と思ったことないです。いつも幸せな、いつも幸福な、いつもねえ、もう、盛んな、ものだと思っていましたねえ」

あるとき、棟方さんの宗教についてうかがったことがあります。棟方さんの感じ方の基礎には、深い信仰があるようです。それは仏教のひとつの古い宗派で〝融通念仏宗〟というのだそうです。ある人の善意の念が他の人に融通されて届き、それが実るという教えだということです。たとえば……「どこか遠くの、イギリスのいなかとか、アフリカの海岸とかに住んでいる人が〝棟方はばかだけどあれは本物だから、あれにいい仕事をさせたい〟と思ってくれるとね、その思いがね、融通されて、飛んできて僕の胸にはいるの。それがねえ、生まれ出てくると、ほんものの仕事になるんです。けれどもね、〝自分〟というもので胸がいっぱいになっていてはだめなの。融通されてもその念がはいれないの、いっぱいだから……」「結局はねえ、自分で自分の仕事をしているというきは、自分の仕事をしていないことになるんですよ。その、ほかの、大きい、ことが動いていて、その人を、仕事させているんですね。それがだいじなんじゃないでしょうか」

文化勲章を受賞したときのインタビューでアナウンサーに〝おめでとうございます〟と言われたときの棟方さんのことばの中にも、そういう〝感じ方〟がにじみ出ていました。

「はあ、やあ、皆さんのおかげであります。ありがとうございました。まあ世の中の大きい恩をね、はっきりいただいた思い、いっぱいであります。はい、ありがとうございます」

（お茶の水女子大学）

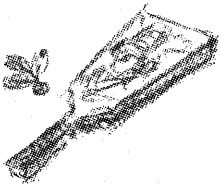
人でつづる保育史

白石トク先生をお訪ねして

赤間峰子

〃来年は、日本の幼稚園百年にちなんで、長年幼児教育にたずさわっていらした方々のお話をうかがう、というのはどうでしょう〃

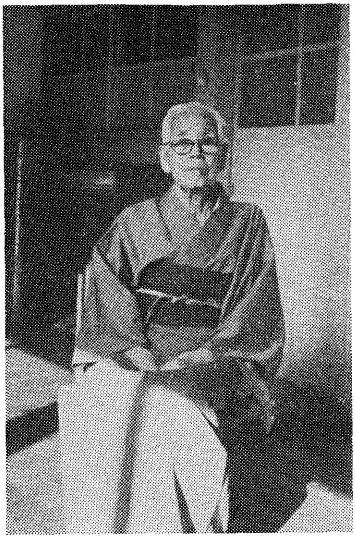
編集会議でこの話合いがもたれて、経験の浅い、世間知らずの私の存じ上げない方々のお名前がたくさん候補にあがりました。企画としても大賛成、その上好奇心旺盛な私は、ぜひそういう先生方に直接お目にかかってお話をうかがいたいと思いました。そして候補者の中から、単純に〃以前原稿もお願いして直接お目にかかったことのある黒田成子先生のお母さま〃ということで、さっそく黒田先生を通して武蔵野相愛幼稚園の白石トク先生に、お話をうかがいたい旨をお願いいたしました。黒田先生からは折返し〃もう少し涼しくなったら〃とお引受け下さるとのお返事をいただきました。



九月に入ってさすがに朝晩秋風を感じるようになった九日、朝から東京には珍しい青空が見られました。私は、黒田先生が送ってくださった地図を頼りに相愛幼稚園に白石先生をお訪ねいたしました。白石先生は、初め、黒田先生のお宅で……ともお思いになったそうですが、やはり幼稚園の方が白石トクという一人の人間の背景を見ていただく意味でもふさわしいとおっしゃった由、私ももちろん幼稚園を拝見したいと思っていましたので楽しみにこの日を待っていました。

玄関を入ると、幼稚園の先生方、黒田先生が迎えて下さり、玄関からつづいた広い保育室の真中に子ども用の机といすが用意されていて、上品な和服姿の白石先生が出ていらっしゃいました。先生は開口一番

〃こんなに腰が曲って……〃と笑いながらおっしゃいましたが、腰の曲っていらっしゃること以外は、私が「わが半生の日記」を



（撮影　赤間峰子）

拝見して想像していた通りの方でした。お年に似合わず物をはっきりとおっしゃって、またそのおっしゃることがなかなかユーモアがあるのです。これこそ保育者として最も大切なことの一つだと私は思います。

私はうかがう途中の電車の中で、あれもうかがおう、これもうかがおうと思っていたことが何となくスムーズに出てこなくて、やはり、日記を拝見して以来憧れていた先生の前へ出て、大分あがっていたのだと思います。先生は〝私は、恐い、きびしいばあさんだと思われているのですよ〟と笑いながらおっしゃいましたが、不思議と私は、〝恐い〟という感じはもちませんでした。むしろ、とてもなつかしいような、何でもお話できる、そういった感じのおやさしいおばあちゃま、でした。

どうも聞き手が下手なせいか、先生が聞き上手でいらっしゃるのか、何だか私のおしゃべりの方が多くなってしまったようで、気がついた時には多分三時半を回っていたと思います。そそっかしい私は時計ももたず、伺う時間だけはキチンとしたいと駅で時計を見て、大体お約束の一時半にうかがったつもりなのですが……。さぞ先生はぶしつけな私の訪問に、お疲れになっただろうと今になって反省しています。

まず先生は、〝私はせっかちだから〟とおっしゃって、私に下さるために用意しておかれたと、〝わが半生の日記〟を一冊（私が津守先生から拝借して読ませていただいたと申上げたことを覚えていて下さって）と、その後編ともいうべき〝おのが日をかぞえて〟（これは限定自費出版されたもので、その最後の一冊とのこと）、そしてそのほか白石先生ご自身のこと、相愛幼稚園のことを私が理解するようにと二、三の資料と、その上私の娘へのお土産を可愛らしい手さげ袋に入れたものを下さいました。娘への土産というのは、私が九月号にメキシコのマリアさんから娘にまで土産をいただいたと書いた、それをちゃんと読んでいて下さっ

て、やはり手作りの外国製の小さな敷物でした。茶と黄を基調にした暖かい感じの毛糸製です。この細やかなお心づかいさすが幼稚園の先生、と感心しましたところ、〝さあ、どうぞ、これでおわり。始めましょうか〟とニコニコと、ケロッとしておっしゃるのです。私もつられて、さっそく先生が幼稚園を始められた動機について伺いました。きっと、故白石牧師と結婚されて、神の子である人間の、そのまた幼いものに早くから神さまのことをわからせたいとお思いになったのでは……と、私はいわずもがなのことをいいました。ところが、先生は、じっと聞いていらして、

〝ちがいます〟とはっきりおっしゃいました。そして次のように話して下さいました。

〝私は島根県の人間です。そして私が四歳のころまで、幼稚園などというものはありませんでした。（先生は一八八六年生まれ）でも四歳になった時、島根県立師範学校に附属幼稚園の前身ともいうべき幼児保育の場所が設けられました。しかし当時のことで官尊民卑の時代ですから、とても私どもが幼稚園へ行けるものではありませんでした。しかし私の父はとても教育熱心な人で、まあ今でいえば教育パパでした。私に十四、五歳の子守女をつけて、その幼稚園に通わせてくれたのです。幼稚園は半日でしたが、毎日の幼稚園通いはなかなか疲れる仕事でした。しかしその時の幼稚園の先生、その方に私は憧れて、『ああ、私も幼稚園の先生になりたいなあ』……それが私がこの道に進んだ理由です。ともかくそんな小さい時分から、なりたくてなりたくてたまらなかったのが、幼稚園の先生なのです〟

私は、先生のこのお話をうかがって、何か胸がときめくような感じがしました。そして先生が夢を見るようなお顔をなさって、

〝幼稚園の何が楽しかったかって……遊ぶことが楽しかったのですよ。桜の花びらがヒラヒラ舞う庭で、黒被布を召した先生、（未亡人が何かだったのでしょう、もちろん当時の私にはわからないことですが）が手風琴、アコーデオンじゃないんですよ、で『さくらあ、さくら』と歌って下さった〟と先生ご自身も小さい、細いきれいな声で歌って下さいました。本当に、私も夢のようでした。そしてなおも先生は、

〝幼稚園はこんなに楽しかったのですが、家へ帰るときびしくて、父は『きょうはどんなことをしてきた』と疲れて帰った私にいったりします。そして、やれ、たたみのへりをふんだらいかん、はき物のぬぎ方が悪い、などそれはそれはきびしい人でした。

そして当時女の子は小学校を出ると裁縫の塾へ行って、そのかたわらいろいろなけい古をするのが普通でした。私も十四、五歳

までに、和歌、お花、お茶、などいわゆるみやびごとをさせられました。それから英語も父は習わせたかったのですが、これは先生が夜でないと時間がおとりになれず、女が夜出るなどということはとんでもないことですから、父が仮名でイット・イズなんとか、などと書いてある本を買ってきまして、それで勉強させられたりしました。

でも私はどうしても女学校に行きたくて、父が親戚を説得してくれまして、やっと女学校一年に入学した時には、同年輩の友だちは四年生になっていました。おまけに私が背が高いものですから、同じ学年の方たちから見ればとてもおとなで、その上先生になりたかった私は、いつも先生のまねごとばかりしていました。

それから、先生になるのなら女子師範へ入った方がよいということで、女学校二年でやめ、女子師範学校の入学試験をうけまして、師範を卒業後は八年間、小学校の教員をしておりました。ですからキリスト教のことも、神さまのことも、すべて結婚後に初めて知ったわけです。私が今でもきびしいといわれ、何事もキチンとしないと気がすまないというのは、この師範学校の教育のせいもあると思いますね。ご承知のように万事コチコチでしたから……。〃

私は、ご自分の幼稚園の時の憧れをもちつづけて、とうとうその夢を実現なさったからには、いわゆる〃教育しよう〃とか〃子どもはかくあるべき〃などという構えがおありにならないで、私から見れば理想的な道を通られたような気がする、と申上げました。すると、

〃ともかく子どもと遊びたかったのです。そうしている内に、どうもこのやり方ではいかん、そんな『自由保育』とか大げさなものではないのですが、子どもを見ているとこういうやり方の方がいいのではないか、と思えてきたのです。子どもに作品を持たせて帰すとか、そういう形にとらわれず、保育室の仕切りもとりました。私は別にそういう学問をしたわけではありませんが、アメリカにおりました時、初めて娘の成子を幼稚園に連れて行きました。前の日から先生へのご挨拶を英語で一生懸命暗記しました。ところが幼稚園に行きますと、出ていらした先生は『ハロー！ ルース（黒田先生のアメリカでのお名前）』と成子の手を引いてあちらへいらしてしまって、私は完全に無視です。

万事こういうふうな自由で解放的なアメリカのやり方とか、日本へ帰ってから旭川におりましたころは、倉橋先生の書かれたものを読みました。大きいものでなく、小さい文が多かったように覚えていますが、この方は男の方なのに、よく子どもと遊ぶ方だと思って感心いたしました。そのほか、お茶の水の講習にも参り

ました。そして、だんだん先生方も遊びのことを理解して下さって、長山篤子さん（現在弘前大学）が十年間自由保育の実践をつづけて下さいました。

世間的な批難や誤解もありましたが、私は眼をつむってたえて、今日まできました。もう今では子どもたちの中にはいると、体力的にかないませんが、いつも子どもたちのそばにいたい、ほんとうに幼児と共に神様にお祈りしたいと思っています。〃

先生のお話は乾いた土に水がしみこんで行くように私の心の中に入って行きました。最後に私は、私個人としてどうしてもうかがいたかったことをうかがいました。

〃日本では宗教というと仏教の家が多く、私の家ももちろん仏教です。でも私は、偶然私のまわりに信者の方を多く見ているせいか、またいい保育をしていらっしゃる方にそういう方が多いせいか、保育とキリスト教の精神というものが放せない気がするのです。でも信者でもない、キリスト教のことを何も勉強していない私が、もし、幼児と一緒に遊ぶ場合、私にもそういうことが（キリスト教の精神をもった保育）可能でしょうか〃

〃もちろんできます。人間がどんなに進歩しようと、どんなに努力しようと、たとえば努力して一流の大学に入学できた。この場合も自分の努力だけではない、その上に大きな神さまの力というものがある。ということがわかっていればいいのです。先だって読んだものの中に、いいことが書いてありましたよ。日本は明治維新の時に西洋の文明を何でもとり入れた。知識技術の面は進歩したが忘れている面があるとありました。私が思うのにすべての根源である神さまのことをおいてきぼりにしたのだと思います。まことにそうです。今はまさにそれを求める時になったのじゃないですか？　心のうるおいですよね〃

このほかにも私はいろいろ、おもしろいお話、ためになることをうかがいました。でも私は思うところあってテープレコーダーを持って行きませんでした。途中で（ことに先生のお歌など）あ、やっぱりテープレコーダー持ってくるのだったな、と思うこともありました。その上お話をうかがうことに夢中でメモもわずかしかとってありません。でもこのすばらしい、白石トク先生のことを一人でも多くの皆さまにお伝えしたいと、帰ってきてその夜、印象のうすれない内に、としたためました。秋晴れの一日の記録がおそらく一月号にのるのではないかと思いますが、寒い冬に秋晴れをなつかしみ、まことに秋に咲くりんとした菊の花のような白石先生を思っていただきたいと思います。

一九七五・九・九、重陽の節句の日

幼い日←→老年

神沢利子

わたしは娘が幼い時、貧しく病気であったので娘とあそぶことも、また、素敵な本も玩具も衣服も、何ひとつ買ってやることは出来なかった。自分が世の中のいろんなことに傷ついておびえてさえいたので、幼い娘を親鳥が雛を守るようにかばうことすら出来なかった。そんな情ない母親は話をすることも下手で、むかしの親たちのように昔話だってろくに覚えていず、アンデルセンもうろ覚えだった。それでも唯ひとつ、自分が育った幼い日の思い出を語る時、はじめて娘たちはいきいきと瞳をかがやかせた。あら、こんなことがそんなに面白いのだろうかとわたしはびっくりし、自分もしぜんに楽しくなって、今は異国となったからふと――サハリンの幼年時代を語ったものである。思えばそれひとつくらいが娘たちを喜ばせたことだったろう。そしてそのことが自分の幼年時代を贖めさせることになり、豊かなものを貰っていたことへの驚きと感謝と、ひきくらべて娘の幼年時代を作る（環境）自分の申し訳なさを思った。そうして、娘へ語ることで呼びさまされた自分の幼年時代への思いが、最初の作品「ちびっこカムのぼうけん」という童話の世界へわたしを誘ってくれたもののようである。

前置きが長くなったが、わたしの育ったのは、サハリン島のまん中へん、東海岸よりの戸数六、七十戸の部落であっ

た。西側に山脈が連なり東北にかけて原野がひろがっていた。とど松やえぞ松の針葉樹林と、楊柳、白樺やナナカマドの林が茂っていた。夏には柳蘭の花が咲き、秋には雪に先だってその白い綿毛が風にとび交うのであった。縞リスが太い尻尾をゆらゆらさせてあそんでいたし、林の中には雷鳥もいた。

わたしの家には馬がいて、町の草競馬に出るほかは父が乗ったり、冬には橇を引かせたりした。鈴を鳴らして馬橇が駈けてくるのを待っていたクリスマスの夜——それは町の中学から帰省する兄たちをのせた橇なのだった。「あの橇の鈴は？」「あれは音色が違うよ」「あ、いっちゃった……」近づき又遠去かる鈴の音に耳を澄ましていた幼い日のことは、今でも鮮やかに思いだされる。

子どもの橇はみな手作りで大きいあんちゃんや父ちゃんが作ってくれた。学校へいくのは勉強にいくより橇にのりにいくようなものだった。運動場の横が丘だったから休み時間はみなが争ってスキーや橇で滑り、放課後も暗くなるまで滑ってあそぶのだった。スキーは今とちがって木製であったから、少年たちは自分で木を削り、先を湯でぬくめて曲げた白木のスキーをはいていた。わたしはスキーを作るなんて珍しくて、つくづくと見守ったものだ。わたしはよその村からこして来て、わたしのスキーは町で買ったものだったから——、スキーを作る少年たちがとてもえらい人に見えた。スキーや橇のない子は雪合戦ばかりしていたと思うだろうが、いや、どうして彼らはちゃんと別のあそびを発明して滑る仲間に加っていた。一番なつかしいのは湯タンポの橇だ。あのブリキの条（すじ）の入った湯タンポは北国には欠かせないものだ。それの潰れひしゃげたところにお尻をのっけて、両手で湯タンポの端をおさえて、つまり小判型のを横向けにしてしゅーっと坂を滑り下りるのだ。ブリキの上に条が入っているのだからそのスピードのでること！　少し反り身になってぐっとのばした足と体で舵をとって滑る。これはちょっと爽快な乗り物だった。

今だってわたしは湯タンポの橇にのってみたい。だれもいないお月夜に山を滑ったら風のようにとぶだろうと思う。

でも、こどもと違ってぶざまなお尻は湯タンポにのっかるかしら、心配だ。そう思うと痩せたお婆さんがいともかるく湯タンポの橇にうちのって、月夜の山を妖精のごとく魔女のごとくとんでいくお話がかきたくなったりする——。

とにかくこどもたちは自在ないきもので、湯タンポがなくたって長ぐつがあった。底のぎざぎざが磨りへってつるつるになった長ぐつは、滑るのにもってこいだった。みんなは丘の上にならんで一列につながってしゃがみ、丘からしゅーっと滑りおりる。何輛連結ものこの汽車はひとりが転ぶと次々に転んで、雪げむりとともに下まで滑りおちるのだった。太って大きな体の校長先生も仲間に入って滑ったが、先生が転ぶと凄い地響きがしてみなは笑い転げてしまうのだった。

思えば雪はこどもたちに平等にたのしみを与えてくれたようだ。雪を転がし雪にまみれ、雪で作ったおうちの中で、ひっそりと空想のお客とあそぶのもたのしかった。こどもたちは限りない雪に限りないあそびを見つけていった。それは都会の店にならんだ精巧な百の玩具よりもゆたかで美しく力づよかった。

小さい時、赤マントにおちてくる雪の片が、きっかりと美しい六角の花型をしているのにおどろいて、息をかけないようにして瞶めていたのを覚えている。あれは自然のふしぎを覗いたはじめての経験ともいえるだろう。自分が生まれた記憶もないのに、ちゃんと小さな人の形をして生きていることのふしぎさは、空からどうしてこんなに雪が落ちてくるのか、あんなに沢山の星が輝いているのか、川がどうしていつも流れているのかというように、すべてのふしぎに繋がって大変稚くて素朴な問が湧いてくるのだった。

朝目がさめると、ふとんの上が霜がおりたようになっていたり、髪が白く凍っていることがあったし、ガラス窓にはあの妖精が描いたような氷の羽根模様が刻まれていた。

そんなふしぎが日常の中にあって、それはふしぎではない見馴れた風景なのだった。

思えば父が掘ることに生涯を賭けた石炭。馬が橇に一トン二トンと積んで来て、わが家の前の石炭置場にざざっとあける。それが冬の慣わしで、わたしたちは石炭を惜しみなく燃やして冬を過ごした。ごおーごおーと音をたてて燃えるストーブの中のオレンジ色の火。この黒い燃える石についても馴れっこになると何のふしぎも湧かないが、思えば何という古いむかしのいのちを燃やしていたのだろう。

幼年の日を思う時、ストーブの火の色に見惚れている自分や、風の音に胸しめつけられて床の中で目を開いている姿や、ぎらぎらと恐しいまで輝く星空を仰いでいるうちに、何とも名状し難い恐しさと孤独におそわれて、それをひとに告げることばもわからず、はばかられて、それから幾日も星空の恐しさにおびえていた日や、そんな姿と一緒に犬の頭をつかんだ儘、盲めっ法犬に引かせてスキーで山野を滑ったスリル溢れたあそびや、川のほとりで一心に小石を磨いたり、泥をこねたり、草や木でおうちをこしらえたり、フレップや木苺つみにあけくれて、木のぼりしたり木をゆすったりしてあそんだ日々がよみがえる。

そうして、それらひとつびとつが四十年という年月を経ていよいよ鮮やかによみがえる時、幼年の意味がわたしにはすこしずつわかりかけて来たように思う。

正に幼年の日にこそすべての核があったのだと——。

そのむかし当り前だったすべてのことを新しくよみがえらせる時、わたしはそこでもう一度幼女となって再び体験するわけだが、その時、その当り前の日常が当り前でなくなり、つまり馴れのベールを剝いだところの新鮮なおどろきと共に、さまざまのふしぎに対面する。それ故、幼年は一層わたしに近くなり髪が白くなった今も、幼い日その背にのってあそんだ金色熊の毛皮——が、いのちある熊となり、まざまざとわたしの内で金色の毛波打たせて立ち上がり、うふぅーと息を吐いたりするのである。

（児童文学者）

私の幼児教育論 XIV

神沢良輔

三　保育の基本（十二）
——幼児とのかかわり合いの中で——

XIV　ひとりひとりの幼児が、保育の内容を選択できるようにしてあげる

(1)

幼児とのかかわり合いをどのようにもっていくかということは、保育のもっとも基本であろう。しかし、それが保育の内容とどのような関係をもっているのかということについては、やはり、いろいろな問題が投げかけられるのではないだろうか。つまり、幼児の毎日の活動というもの（保育内容といってよいであろう）を、幼児とのかかわり合いの中で、どのように位置づけていけばよいかということである。

たしかに、幼児を保育するということは、幼児に望ましい活動をもたせ、保育のねらいを達成させることであろう。そのためには、幼児のとりくむ活動は幼児の発達にみあったものでなければならないし、保育者には、そのような活動の発達ということを予測したり、理解できているということが要求されよう。このような側面からみると、保育内容を構成して、保育計画とか指導計画をどのようにするかということが前面にでてくる。

いうまでもなく、幼児の発達や、幼児の活動についての発達を見通して、しっかりとした指導計画をたてて指導するということはたいせつであろう。しかし、それで保育ができるということにならないことはいうまでもない。そこに幼児とのかかわり合いの基本的な課題があるのではないだろうか。換言すれば、幼児は保育者とのかかわり合いの中で安定感をもち、自己を実現することによって発達しているということになるからである。

(2)

そこで、私の見学したある幼稚園の保育についてみていくことにしよう。

その幼稚園は、園庭の広い幼稚園で、幼児たちはとても元気に遊んでいた。楽しく見学していると、十時頃になると、四歳児が保育室に集合しはじめた。そこで、何が始まるのかなと興味をもってみていると、間もなくしてテラスの前にでてきた。そして二列に並んで、保育者が何かかごのようなものをもって、先頭に立って歩きはじめた。

しばらくは、どうしようかと幼児たちの去っていくのを見守っていたが、なんとなく気になるので、幼児たちの後を追っかけることにした。すぐに幼児たちの列に追いついたが、急に列の流れがおそくなった。そこには、園庭の中を横切っている道路があり、横断歩道のしるしがしてあった。

私が追いついた時には、ちょうど列の半分ぐらいの幼児が渡りおわったところであった。保育者は、横断歩道を渡りきったところで、つぎつぎに渡ってくる幼児たちの列を整えながら、手をあげてくる幼児たちの横断歩道の渡り方に注意を払っているようであった。

そのうちに、ささやかなトラブルがおきた。幼児たちの列は、背丈の低い方から順次並んでいたようで、列の後半には、身体的に成長の大きい幼児たちが残っていた。

そのような幼児たちのひとりが、手をあげずに、いささかふてくされたように肩を左右にふりながら、ゆっくりと横断歩道の上を歩いて、横切っていった。もちろん保育者は、このようすを、幾分困惑げにみていたが、渡り切るとその幼児に近づいていった。保育者と幼児との会話は聞きとれなかったが、もう一度やり直すように話をしたのだろうか、その幼児は、横断歩道をやはり手をあげずに不満そうな顔をしてもどってきた。この間に少しの幼児たちは、手をあげて渡っていったが、そのようすをみていた残っていた幼児たちは、この幼児の行動に対して、決して否定的に受けとめているようには思われなかった。むしろ、一部の幼児たちの中には、肯定的な態度さえ示しているように思われた。

このようなことで、その幼児のつぎの行動に影響を与えたかどうかはわからないが、この幼児は、やはりはじめにしたと同じ行動でまた横断歩道を渡っていった。もちろん保育者はこのような幼児の行動に対して、否認的な態度をとっていたが、あまり効果はなかったようだった。

そこで、保育者は、もう一度横断歩道の渡り直しを幼児に求めた。その幼児もしかたなく、もう一度もどってきたが、この時には横断歩道に残っている幼児はいなくなっていた。ひとりになっ

て幾分さびしそうな、てれくさそうな顔をしていたが、この幼児は横断歩道を渡る態度は変えなかった。

保育者の否定的な態度はさらに強くなって、幼児に再度、きちんと手をあげて渡ることを要求したようであったが、急に幼児の行動は攻撃的になり、保育者を足でけとばしはじめた。保育者は、いたわるようにして幼児の行動を受けとめていたようであったが、幼児は遂に泣きじゃくりながら、攻撃的な行動をくり返していた。幼児は保育者にだきかかえられて、やがて攻撃的な態度も低下していった。

それとともに、幼児たちの列は整えられ、再び集団の行動がはじまった。

(3)

幼児たちの行き先は、〃砂遊び場〃であった。広い砂遊び場に着くと、保育者は、その周りを幼児の列をひきいてぐるりと一周した。すると、幼児の列が、うまく砂遊び場をとりまくようになっていた。保育者はそこで幼児たちを坐らせて、自分のもっていた〃かご〃を、砂遊び場の中に置いた。その中には砂遊び用のプラスチックのスコップがいっぱい入っていた。

つぎには、幼児たちの靴をぬがせ、それを砂遊び場からすこし離れたところに、きちんと置かせるとともに、その中にぬいだ靴下を入れさせた。そしてもとの場所へ坐らせた。幼児たちは、素足の感触が気に入ったのか、足をさかんと動かしては満足そうである。

保育者は、スコップをひとつずつ幼児にくばってから、砂遊び場でスコップを使って遊びましょうと指示した。幼児たちは、裸足で喜んで、砂遊び場の中に入っていった。最初は、スコップで砂を掘っていたが、しだいに掘ることだけではものたりなくなって、砂遊び場の中を走り出す幼児もでてきた。そのうちに、砂遊び場の近くにある水道の蛇口をみつけた幼児は、得意になって水を出し、手で砂遊び場の中に運ぼうとした。

保育者は、砂遊び場の外で、幼児の行動を立ったまま観察していたが、やがて幼児が水道の所へいったのをみて、その近くにいったので、どのような援助をしてあげるのかと思っていると、そこにいた幼児たちに、やさしい声で〃今日は、水道は休みなの、スコップだけで遊ぶのよ〃といっている声が聞こえてきた。幼児たちは、残念そうな顔をして、また、砂遊び場にもどってきた。

(4)

この保育は、私には、とっても印象に残ったので、すこし記述

が長くなったがお許しいただきたい。

確かにこの保育は、保育者の意図とか、ねらいとか、一般的な配慮とかいうことからみると、きわめて立派な保育だということができる。

つまり、横断歩道のところでは、手をあげて渡るということをねらったのであろうし、このような基本的な生活習慣については、例外なく、くり返しの中で指導することは正しいことであろう。

また、砂遊びの指導においては、スコップで砂を掘るということをねらいにして、すべての幼児に同じ経験をもたせようとしたのであろう。靴や靴下の整理のしかたなどはきわめてうまい指導であり、とくに素足にして砂の感触を楽しませるということなど、すばらしい配慮である。

しかし、この保育は、なにか指導計画にもとづいて、それを展開していくということだけが前面にでて幼児とのかかわりということで欠けているように思うのである。すなわち、保育者の側からみると満足できる保育であり、その意味において理解できるが、幼児の側からみて十分に満足すべきものであったか、ということについて、多くの問題を残しているように思われるのである。つまり、保育者の側にとって、綿密に意図されたものが、幼児にとってどのような意味をもつものだろうか、ということでもある。

換言すれば、保育者は指導計画の管理ということに集中しているようで、このような中では幼児としてのほんとうの活動はできないのではなかろうかということである。幼児の中には、自動車の走っていない横断歩道を、手をあげて渡る意味に疑問をもつものもいるだろうし、砂遊び場では、水を使って遊びたいという衝動にかられるであろう。

もちろん、ここに示した幼児の行動が、このようなことだけが原因であるというようにいえないことはいうまでもないが、やはり、幼児にとって、もっともたいせつなことは、ひとりひとりの幼児が保育者に認められているという実感の中で、自己を思う存分表現できるということではないだろうか。

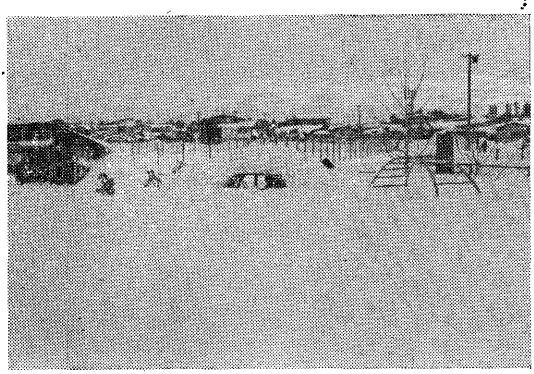
そのためには、指導計画をたてることは必要ではあろうが、保育場面においては、保育の内容は、決して幼児にそれを強要すべきではないし、また強調さるべきものでもないであろう。保育の内容は、保育者とのかかわり合いの中で、幼児が自由に選択できなければならないということがやはり、保育の基本にあるのではなかろうか。

（暁学園短期大学）

私の保育

雪の日に

小泉庸子



今日も昨夜に降った新雪で垣根も遊具も白く綿帽子につつまれている。登園してすぐテラスから中庭を見ていた三歳児の由美子は、突然「先生、大事件、大事件、早く来て」との声に、室内にいた子どもとテラスに出て見ると、中庭の門が開いている。（ここは通用門ではなく非常出口用の門である）そして、点々と一人のくつあとが続き、庭を一周して出て行っているのであった。

由美子が「ね、大事件でしょう。誰れか幼稚園に入って来たんだよ。誰でしょうね」と云うと、そばにいたやはり三歳児の和生が「うんたしかに長ぐつのあとだ」と云うと、やはり三歳児の守央がすかさず「きつねかな」と云った。すると和央が「きつねより大きいよ」守央「くまかな」和生「熊じゃないよ」とどこかで聞いたことのある会話をしている。と由美子が「わかった、サンタクロースのだ。グリとグラのお家にだって足あとついてたでしょう」と云った。和生は「うン（そうだよ）だよ。クリスマスの時サンタクロースここ

から入って来たっきゃ」。守央「うんだっきゃ、後ついて行けば、サンタクロースのお家に行けるよきっと」。守央の確信にみちた言葉は、そこに居合せた子ども一同の確信でもあるように感じられた。

子どもたちの会話を考えてみると、先月のクリスマスには、サンタクロースがこの門より帰って行くのを皆で見送ったのだった。その経験と、絵本〝グリとグラのおきゃくさま〟の経験が重なり、絵本の会話がそのまま生きて対話され、三歳の子等にとり、大事件であり発見の喜びでその日の遊びは、積木でグリとグラの家を作る者や、雪だるまを作って楽しむ者などで、豊かな楽しい一日であった。（駄足であるが、そのくつ跡は大人のものではなく、小学生低学年程度の小さいものであった。）

私の勤務している園は、津軽富士といわれる岩木山の姿が美しく見え、リンゴの故郷、弘前市の新興住宅地の中央に位置し、幼稚園の前は、団地の中央児童公園となっており、この公園には、桜、かえで、もみじなどの木、又、小山が二つあり、夏はころげまわり、かくれんぼをし、冬はスキーや、ソリのスロープになり格好な場所として利用し、比較的に自然と空間に恵まれた中に立っている。園児は八〇名、三歳、四歳、五歳と三クラスで構成され、園児のほとんどは、子どもの足で十五分以内のところから徒歩で通園している。

十一月末には雪が降り、卒業の三月末にもまだ庭の芝生が見えない年も多く、また、一夜に三十センチ以上雪が積ることもめずらしいことではないのである。この一、二月の季節は、雪、雪、雪という生活で室内にとじこめられてしまうと考えるのは大人で、子どもたちはこうした生活の中でも持ち前の天才的、想像力と創造力で次々に遊びを作り出し、考え出して行く。特に子どもは〝風の子〟のことば通り、雪が降って喜び、少しぐらいの吹雪でも外で遊びたいと云うのである。停電でボイラーが回らなく、暖房が切れて降園時刻を早めた時など、「大丈夫だよ、僕たち外で遊ぶから、お部屋寒くたって。だから幼稚園にまだいてもいいでしょう」などと年長組から抗議を申し込まれたりするのである。

毎年、クスマスの園児たちへのプレゼントは、母たち手作りの物をソリにつけて、サンタクロースが引いて来ることにしている。そしてそのソリもプレゼントとして置いて行くのである。こうして毎年ソリを買いたして三十台程あり、好天の時など、全クラス（希望者のみ）で前の小山へすべりに行くのである。

津軽富士が白く輝いて見える日など（この地方はこの山の見え

方によって天気を予測する）家を出る時からソリ遊びときめているらしく、働き者のケイティ（除雪ブルドーザーを絵本の愛称のように子どもたちは言っている）が通った道を元気にかけて来、あいさつのかわりに、「ケイティのおかげだね。今日も又前の小山に行こうね」と念をおされるのである。ソリは毎年少しずつ改良され、すべりよくなっている。年長組はどのソリがよくすべるか、どのそりは前へも後へもすべるかなどを知っているのである。登園早々から、雪あそびの道具（我が園特製、母の手製で、くつに雪が入らないようくつカバーと手袋である。子どもはどんな深雪でも、むしろ人の歩いていない新雪を歩くことを好み、長ぐつに雪が入り、くつもくつ下も、ズボンもぬらしてしまう。手袋も登園までの道のりでぬらして来る子もめずらしくなく、雪あそびをした日は降園時まで乾かないため各自替えを園に置いておく）を用意する。

身仕たくをした子らは「先生まだ？ 前のお山に行ってもいい」などと、担任をせめるのであるが公園は園の外であり、目もとどかないので、子どもだけでは行けないことにしているのである。またその日の天候や雪質により、アイスバーンになっている時などは、少しとけてやわらかくなるお弁当後とか、新雪の深雪の時は、年長の男の子と用務のおじさんと下調べとしょうして地固めに出かけるというふうにしている。

年長組の男の子等は、ソリの乗り方もいろいろ工夫したり変化させ、スロープに大きなギャップを作り、高くジャンプすることを競ったり、又乗りながら体重を右や左に移し、前の綱でかじを取るとカーブすることを体得し、下まで降りる間に何度カーブ出来たかなどを競ったりするのである。

我が園きってのスポーツウーマン、スキーのベテランN先生が男の子等に教えられ、何度やってもすぐ真直ぐ行ってしまい、その度「そうでなく、もう少し体をそっちにまげて」とか子等に叱咤激励され、やっと少しカーブ出来たとの事等、子どもは、何でも新しい経験は仲間に伝え、教え、体で体得して行くのにおどろかされる。

ある日、高校（同じ経営母体の私立男子校）より電話があり、学生を一人そちらに向わせるから、雪かたづけでも何でも力仕事をさせてほしいとの事、理由は、学校の規律に反し、謹慎処分として授業停止をし、幼稚園で何か労働させてほしいとの事であった。

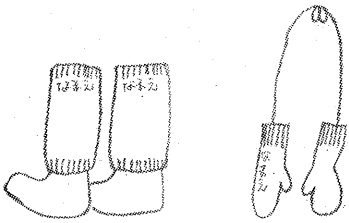
それで、園庭に雪の坂を作ってもらう事にした。その学生は、ふてくされたような、おこったような顔をし、ブラブラとやって

来た。見ると最新流行のヒールの高いブーツをはき、ポケットに両手をつっこんだままつっ立っている。働きやすいように用務のおじさんの長ぐつと軍手を貸し、庭に送り出した。しばらくいやそうに、雪かきとスコップを交換したり何となくダラダラと雪を集め積んでいた。それを見つけた子どもたちは「あ、僕たちの学校のお兄ちゃんだ」「坂作りに来てくれたの」「お兄ちゃんがんばって」「僕も手伝う」などと、五、六人の子はとび出して行き、終いには坂作りはそっちのけで、その学生と子どもたちは雪ぶつけをしたり、相撲をしたりで、あのいやいやした生気のなかった姿はどこへやら、あせと笑顔とざんばら髪になりながら子どもと過していた。……子どもたちにとっては、雪の坂のように春になったら記憶から消えてしまう経験であったかも知れないが、あの学生と、そして私共職員は、子どもが、あの学生に笑顔と生気を与えた事実を、そして教育にとって最も大切なものは何であるかを教えられ、わすれることの出来ない冬の日の一日となった。

こうして、私共は、子どもの夢中になって遊ぶ遊びや姿を通し、人と人との出合い、人と物の連りなど日々新しく知らされ、教えられながら、保育というわざの一役を荷負わせてもらっている。

そして、今後も子どもと共に感動したり、発見したり、子どもの喜びや悲しみを共感出来る大人でありたいと願っている。

（東奥義塾幼稚園）



ゴムあみも長目に。
毛糸であんだ手袋とクツカバーをして。

初めての幼稚園見学

立川多恵子

はじめに

教育をもっとも単的なことばで表現すると、〃子どもの発達を助ける〃ということになろう。そこで、教師の役割は、〃子どもの発達を助ける人〃ということになるのだが、問題なのは、助け方である。どんな助け方が子どもの発達にとってもっとも有効であるかは、子どもの内面性を理解することの出来ないものは論じる資格はない。

したがって、幼稚園教員養成においても、教育の方法論を打ち出す前に、子どもの内側の要求を理解することが大切になって来る。そのために、各養成校とも、さまざまな教育計画が用意されていると考える。

私の学校では、子ども側に立ってものを考えていく姿勢を身につけるため、子どもにふれることがまず必要であるとして、見学や観察を計画し、実践している。本稿では、学生にとって〃初めての幼稚園見学について〃報告する。

新入生の幼稚園観

本校の学生は、目的意識がはっきりしている。そのことのよしあしは他稿にゆずるとして、学生たちは、将来どんな職場で働くことを目的にして本校へ入学するのか知っておきたいと考え、ここ数年、最初の時間をさいて〃幼稚園とは〃というテーマでレポートを書かせている。

レポートの内容を大別すると、次の二つの傾向に分けることができる。

(一) 自分の通園経験から幼稚園をとらえている場合

学生Nの文を引用すると、「私の幼稚園時代を思い出すと、近所の友だちと手をつないで、小さなかばんにお弁当をつめて通ったことを思い出す。園では、みんなで一緒に先生のピアノに合わせて歌をうたったり、人形劇などを見ることができ、楽しかったように記憶している。絵を書いたり、工作をしたり……といろいろな思い出があるけれど、先生にほめてもらえるということが一

番うれしかった」と述べている。

㈡　一般社会で通念化されている幼稚園を書いている場合

学生Yは、「幼稚園とは、子どもが家庭という小さな社会を出て、初めて同年齢層の社会を作る場である。その集団の中で、子どもは小学校入学の準備をする。……中略、具体的な指導内容としては、おゆうぎ、お絵かき、粘土あそび等が考えられる」と結んでいる。

前者の場合は、自分の思い出の中に生きる幼稚園について書いているので、きわめて情緒的なとらえ方をしているのが特徴である。後者は、自分自身に通園経験のない場合が多く、概念的な表現が目立つ。こうした幼稚園観を、初期の段階に一旦、〃何かで〃ゆすぶっておいて、幼児教育の原点から出発して貰いたいと考える。その〃何か〃が、本校の場合、初めての幼稚園見学である。

見学対象幼稚園の選定

初めての見学ではあるが、指導者側にはねらいがある。したがって、見学する幼稚園は次のような条件を満たしてくれるものとしている。

㈠　子どもが主体的に活動することの出来る保育形態

（子どもが主体的に動いているので、子どものさまざまな活動が見られ、見学の学生の視点が子どもの側にむけられる）

㈡　子どもとの消極的な接触を許可して貰える幼稚園

（子どもとふれ合うことが許されない場合、幼稚園の外側からみて批判的になる）

前記の二点を満たすことの出来る幼稚園を見学対象園として選定している。したがって毎年限られた幼稚園の御好意に甘える結果になってしまっている。

見学時間について

見学時間は、園児の登園時刻から昼食開始時刻までとしている。余り長時間にわたることは、見学に慣れない学生が疲労するばかりでなく、その日の保育を完全に妨害することになりかねないので、二時間余の見学時間にとどめている。

子どもたちが昼食を取っている間に、ホールで園長先生の話を伺ったり、質問に答えていただいたりしている。

保育形態への疑義

提出されたレポートを読んでみると、殆どのレポートが保育形態に注目している。自分の中にある幼稚園イメージと、見学幼稚園の形態的な相違を、冒頭に上げて比較している場合が多い。

学生Aは次のように述べている。

「私の想像していた幼稚園という形をみごとに破られた気がした。私は幼稚園について、何時になったら教室（保育室）にみんなが集まり、挨拶をかわすのだろうと、そればかり待っていた。しかし九時半になっても、どのクラスもあつまる様子は見えない。自由に庭に出てあそんでいる子どもたち、教室に入って、一人でレコードをきいている男の子、数人で集って絵を書いている子どもたち、私はあっけにとられた。四歳児の教室に入って、そばにいる園児に『折紙はしないの』ときくと、『しないよ』という答えが返ってきた。私はなんて変った幼稚園なんだろうと考え、室内を見廻した。しばらくその部屋にいたが、先生らしい人が現れないので、『先生はどこにいるの』と子どもにきくと、『あそこにいるよ』と庭のずっとすみをさして、平気な顔で答える。私は、ますますなんていう幼稚園だろうと考えた。……中略、園長先生のお話で、一応、その幼稚園の方針は理解することができたが、砂場がきらいな子は、ずっと砂場のよさを知らずに育って行くのをどう考えたらいいのか、嫌いな絵でも何枚も書いているうちに、楽しさを覚えてくるのではないだろうか……中略、半日しか見学していないので、この幼稚園のすばらしさがわからないのかもしれないし、私の頭にこびりついた型にはまった幼稚園の姿が捨てきれないのかもしれない。今後、子どもを見る目を養うことによって解決して行きたい」と結んでいる。

初めての幼稚園見学なので、どうしても外側から見る結果になってしまっている。自分たちが描いていた幼稚園と形態を異にした園の見学が、学生たちの頭の中にあったイメージをゆすぶり、その結果湧出した疑問が、学生たちに思考する機会を与え、〃子どもを見る目を養いたい〃という方向に発展したことは、指導者側のねらうところである。

子どもとのふれ合い

少数ではあるが、中には見学幼稚園で展開されている保育をそのまま受け入れて、子どもの活動に興味を持ち、子どもの心の動きや、それに対応する大人の役割を考え始めている学生もある。

学生Eは、次のように述べている。

「五歳児の部屋に入ると、子どもたちがいろいろな活動をしていた。……中略、すみの机で、赤いイチゴのとなりに緑色のイチゴを描いている子どもに、『あおいイチゴね』と声をかける。『うん、もうじき赤くなるよ』といわれて、はっとする。子どもたちは絵を書きながら、いろいろなことを思いめぐらしていることを知った。さっき見て、「変だな」と思った水色のお日様も、もし

かしたら、雨が降り出しそうなのかもしれないと思うと、子どもの気持を大事にするには、子どもの中から生まれ出ようとしているものが何であるかを考えてみることができなければならないと考えた。……後略」

また、学生Fは、次のように書いている。「四歳児の部屋では、友だちが子どもたちとあそんでいた。わたしもどの子とあそぼうか考えていると、一人の男の子がブロックを見せにきた。床にしゃがんでみていると、女の子が「カステラどうぞ」というので驚いた。気をひくために私のそばでブロックをいじっていたら、なんとなく四角いものができたので、カステラどうぞといったのか、私にカステラを御馳走したくて作り始めたのか、どっちかなと考えた。しかし、その意味がどうであっても、わたしとしては、カステラを御馳走してくれた子どもの厚意を素直に受けとめることが、その時は大切だったのだと感じた……後略」

学生Eの記録は、子どもに何げなく投げかけたことばの波紋から、外側に見えるものと、内側にあるものとの違いに気づき、子どもの内側にあるものを考える大切さを指摘している。

学生Fの記録は、子どもの行動をこまかく観察し、その意味を知ろうとする分析的な観察より、子どものそばにいる人間として、子どもの気持を快く受容することの大切さにきづいている。

初めての幼稚園見学では、一般に学生は保育形態に注目してしまう傾向があるが、中には一歩踏みこんで、子どもの内面を知ろうとする学生もいる。

子どもと接触する機会を得て、子どもの内面にふれ、感動したE、子どもを理解することが、子どもの内面を分析的に見ていくことばかりでないことに気づき、一時でも、子どもと生活を共にする大人の役割を考えるF、二人は〃子どもの気持を大切にする〃という保育の心を、すでに持ち合せている。

むすび

初めての幼稚園見学は、養成のプロセスの中で、すでに大きな役割をなしている。

学生は、入学時にいだいていた幼稚園イメージを一度くずすことによって、子どもの内面を理解することの大切さに気づく。

この見学の後、本校では、子どもとのふれ合いを通して、子どものことをもっと知りたいという学生の要求を、そのまま受け入れて長期観察に入る。

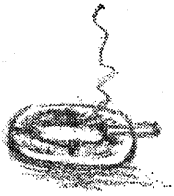
その結果、子どもとのふれ合い、子どもの行動を共感的に考える中で、自分たちの役割を確認し、〃子どもの発達を助ける〃という本当の意味を知ることになる。

（埼玉県立教員養成所）

「日本幼児保育史」研究余滴（一）

村山貞雄

はじめに



日本保育学会著「日本幼児保育史」（フレーベル館発行）が昭和五十年五月、第六巻が発行されて全六冊が完結しました。そのお祝いが六月十二日、神楽坂にある出版クラブでささやかに行なわれました。その席で、執筆者たちから、共同研究中の苦労ばなしや裏ばなしが話され、出席された人々の強い興味をひきました。

そして〈これらの話を本に載せて多くの人々に知ってもらったら〉という意見が持ちあがりました。この会には、執筆者の一人として津守真先生が出席しておられましたが、先生が編集しておられる「幼児の教育」で引きうけてくださることになり、これらの話が本誌の新年号から連載されることになりました。今月号は、その第一回で、やや固苦しい話になりますが、私が前座をつとめさせていただきます。

本誌に、幼稚園百周年に当たる昭和五十一年の新年号から、この保育史うらばなしを連載できるようになったことを衷心から嬉しく思います。

形式的だったスタート

今から二十年ほど前の話になりますが、昭和三十一年のことでした。東京女子師範学校の附属幼稚園が明治九年に創られたので、昭和三十一年はちょうど八十周年になり、文部省主催だったと思いますが、多分その年の十一月には記念式典が日比谷の公会堂で行なわれたように思います。

この年、日本保育学会でも、八十周年を記念して何か研究をしようということになりました。

五月頃でなかったでしょうか。常任委員会で、もともと八十周

年という歴史的なことの記念なのだから、歴史的な研究がよいだろうということになって、「本邦幼児教育史の研究」を始めることが決まりました。共同研究の委員は、会長（委員長）のほか二人の副会長と九年の常任委員の全員が就任しました。私も常任委員をしていたので研究委員の一人になりました。

しかし実際にはこの研究委員が研究に当たるというわけでは全くなく、すぐに小委員会というものが作られ、小委員会の委員が、それ以後、実際の研究を全部してきました。小委員会の委員のかたがたは、これから本誌に、毎月一人ずつ保育史のうらばなしを書かれますから、ここでは名まえをあげずにおきましょう。

どうして、研究委員会と研究小委員会というような二本建ての面倒くさいことをしたかと言いますと、一つにはこの研究委員会でまだほかの研究テーマも取り扱おうという気があったような感じがしますが、大きな理由は、学会の共同研究だから、学会の常任委員が当然委員になるべきだという気持ちがあったのでした。また、そうしておかないと、学会の偉い人からソッポを向かれ、経済的な協力その他の協力が得られなくなる心配もあったような気がします。今から考えると、当時はずいぶん官僚的・形式的なふんい気が盛んだったように思えます。

小委員会の委員のかたは、今は皆さん立派な学者になっておられますが、その頃はまだ将来を嘱望された新進の学徒だったものです。これらのかたは、将来大をなす素地を当然持っておられたのでしょうが、同時に、この共同研究に参加することによって伸びられた面もあったのではないでしょうか。私はこの小委員会の委員長になりました。

共同研究のむずかしさ

小委員会の委員には、私のほかに学会の常任委員がいませんでしたので、以後、私は学会と小委員会との連絡の仕事もしてきました。その間、研究があまり長びくので、学会（常任委員会）の方から、時折り催促され、そのたびごとに小委員会に伝えて、皆さんに研究のスピードをあげることをお願いしたものでした。なにしろ研究を始めてから約二十年経った昭和五十年に研究が一応完結したわけですから、学会の会長・副会長をはじめ常任委員や会員のかたがたも、ずいぶんしびれを切らしておられたことと思います。

しびれを切らしたのは学会だけではありませんでした。研究結果を発行することになっていたフレーベル館からも、しょっちゅう文句を言われたものでした。フレーベル館に対しては研究を始めてから数年後に二冊の本を出すことを約束していたのですが、

それがなかなか出来ず、昭和四十三年になってやっと第一巻が発行されました。第一巻に私の書いた「まえがき」を読み直してみましたところ、「この共同研究が今回まとめられて三冊の本になったわけであるが、委員一同十余年の苦労を顧みて心からの喜びを禁じ得ないでいる」と書いています。このとき、二冊を三冊に変更することにしてフレーベル館の了解を得たわけですが、このまえがきにあるように、三冊を相次いで発行する約束をしたものでした。それが第二巻の出るのも遅れてしまい、昭和四十三年に第二巻が四十四年に第三巻が、さらに四十六年に第四巻が出、第五巻は昭和四十九年になりました。この間、フレーベル館からはずいぶん文句を言われ、板ばさみになった私は、性格の弱さもあって困ってしまうことが少なくありませんでした。実際、読者が忘れた頃になって思い出したように次の巻が出るのでは、売れゆきも悪くなり、フレーベル館の計画も立たず、また、すでに買った人から社に文句もきたようで、フレーベル館に迷惑をかけてしまいました。

この経験から思うのですが、共同研究というものが、いかにむずかしいか、今後いい加減に共同研究は始めるべきでないという気がします。とくに昭和四十年過ぎからは、小委員の先生方も最もいそがしい第一線の学者となられ、皆で集まるようなことがますますむずかしくなってきましたが、一流の学者の共同研究は本当にむずかしいことなので、共同研究は始められるかたは、よほど考えてから始められるべきであると、つくづくと思います。

それでも曲がりなりにも、この共同研究が成功した原因の一つは、全員の分担内容を明らかに区分して、各章の終わりにそれぞれ執筆者の名前を記入するようにしたことでした。

一寸先は闇だった

私はたまたま江戸時代の幼児の教育を調べていたので、明治以後の幼児保育のことも知っているだろうと思われて、小委員会の委員長にされたのでした。

しかし私は明治時代のことは全く知らなかったのです。それで、ほかの小委員の先生がたも、内心、頼りないやつだと思って軽蔑されていたのでないかと思います。はじめの数年はよく会合をもちましたが、その頃の先生がたの態度から、そのようなことを感じたものでした。

そこで私は無我夢中になって頑張りました。霧のロンドンを歩いていると一尺先が見えず、歩いて行くにしたがって少しずつ先が見えてきます。研究するにしたがって明治時代の保育の姿が次第に分かってくるありさまは、まるで、この霧のロンドンを歩い

ているようでした。そして明治時代を研究しているときは、大正時代のことはまだ全然分かりませんでしたし、大正時代をやっているときは、昭和のうち戦前のことは全然分かりませんでした。

先ほど研究が長びいたのは共同研究のせいのように言って、私の責任のないような言い方をしましたが、こんなことが、研究を長びかせた一番大きな原因だったかも知れません。

しかし私にとっては、この研究が「なんでもやれば出来る」という自信（信念）を作ることになりました。また全然新しいことにも落ちついて着手する自信（態度）を作り、これが現在の私の役職の遂行に役だっています。

研究が人生観を高めてくれた

実際、研究を始めるにしたがって、つぎつぎに新しいことが発見され、明治初期だけで一冊ぐらいの分量になってしまい、二冊の予定が三冊になり、三冊の予定が最後には六冊になり、しかも六冊の終わりが昭和二十三年ということになるなど、長い時間がかかってしまいました。

しかし長いあいだ一つの研究をしてきたためによかったことも少なくありませんでした。とくに私自身のためにいろいろ役に立ち、この研究をさせてもらったことは、有難いことだと心から感謝しています。

たとえば、深みのある研究には時間がかかることを知りました。昔の人が「運、鈍、根」ということを言っていますが、根気ということの大切さを実感しました。

とくに研究の初めの頃はたいへんでした。いろいろな土地に行って資料を見つけても、今のようにコピーするのでなく、これを書き写したものでした。今なら三十分もかからないことを、たっぷり一日かかって一心不乱に書いたものです。書いたあとで、どこか間違えてないかと思って読み直すなど、ほんとうに気の疲れるたいへんな仕事でした。今の学生を見ていますと、その点、コピー、計算機などが使え、ずいぶん楽になっています。文明の利器は、これをどしどし積極的にマスターして使用することは賛成ですが、学問に必要な「落ちついて根気づよく」という点が欠けてきているように思えます。この点は、今の学者の反省しなければならないところでないでしょうか。

それから、こんなことにも気がつきました。それは、ずいぶん、まちがったことも伝わっている、歴史というものは、近いことでも正確でないことがたくさんあるということです。ごく最近のことでさえ、語る人によって、内容がかなり違っているのでした。ここから、私たちはうそを言わないようにして、できるだけ

正しいことを伝えることが大切だと思いました。しかし、それよりも増して感じたことは、昔の人に対して、軽々しく批判してはならないということです。また世の中には埋もれた（埋もれたという言葉を使うのもおかしいのですが）立派な人がたくさんあることにも気がつきました。こんなことから、地方に調査に行ったときなど、歴史の流れの中の一つの時点に短い生を受けた自分の生き方を考えたものでした。どのような態度で人生を生きぬくのが最も価値のある生涯なのかと考えました。この研究は私の人生観を高めてくれたと言えます。

忘れ得ぬ思い出のいろいろ

長い研究のあいだには、いろいろなことがありました。資料をさがして神田の古本屋街を歩いていたときのことでした。ある書物が、数軒の本屋のどこでも一万円を越していたのが、ある本屋で三千円で売っているのを見つけて、とても嬉しかったのを覚えています。しかし、買ったあとで、その本屋さんに対して悪いことをしたような気になりました。

こんなこともありました。東京女子師範学校の附属幼稚園を調べているうちに、この園の保母さんである豊田芙雄氏が、藤田東湖の姪で、暗殺された勤皇の志士豊田氏の未亡人であるということを知ったとき、私はたいへん感激しました。

今まで江戸時代の子どもの教育を調べていた私にとっては、あの幕末から明治維新の混乱のさなかに日本の幼稚園が誕生してくる当時の雰囲気を如実に感じて、感慨うたたなものがあったのです。

それで私は大学で学生たちに、日本の最初の保母さんは藤田東湖の姪であることを感激をもって語ったものでした。しかし学生たちは、まったく無表情でピクッとも表情を動かしません。私はもう一度言い直しましたが、反応はまったくありませんでした。私はガッカリしました。

そのあと、私は研究室に帰ってから考えてみて、今の学生たちは、藤田東湖が有名な学者であり、勤皇の志士であり、安政の大地震のとき、お母さんを助けようとして家にとびこんで亡くなった人であるということを全然知らないのではないかと思いました。

私は昨年ふとそのことを思い出して私の息子どもに、「大学の授業で『日本の最初の保母さんは藤田東湖のめいだ』という話をしたが、学生はピクとも表情を動かさなかったので、お父さんはガッカリしたもんだよ」と話しました。すると大学二年生のその息子は、「お父さん、その藤田東子という女の人は何をした人な

の」とたずねたものです。百年たてば、ほんとうにいろいろなことが変わるものです。

長い研究のあいだには、たくさんの人々から協力を得ました。親切にしてもらって涙が出るほど嬉しかったこともあります。たとえば東北地方へ行ったとき、汽車の中で知り合った人が「盛岡に古い幼稚園がある」と言って、わざわざ盛岡幼稚園に連れて行ってくださいました。そして最後まで世話をしていただきました。最初は、けんもほろろだったり、非常な剣幕だった人が後には熱心な協力者になってくれた人もありました。富山のアームストロング女史はその一人です。

ある地方の幼稚園に、借りていた資料を返しに行ったときのことでした。人のよさそうな園長さんから「たいへんお役に立つと思われる資料があったのですが、誰だったかに貸してあげたところ、返してくれないので残念です。今の人は約束の期限を守らなくなりましたが、嘆かわしいことですね」と言われました。その資料を借りたのが、実は私だったので、返すために持って行った資料を出しそびれてしまい、また汽車に揺られて持って帰ってきたことがありました。

協力を得た人のうち、何人かの人は、国木田独歩の作品のように、私にとって「忘れ得ぬ人」となりました。そのなかには、すでに亡くなった人もあります。資料収集中に起った、こんな人間関係をもとにしたいろいろな出来事をお話したく思うのですが、与えられた枚数が尽きましたので、そろそろペンを置くことにします。しかし、次号から連載される先生がたのお話の中に、そのような具体的なこぼれ話やエピソードがたくさん出てくると思います。楽しみにしてお待ちください。

最後にひとこと付け加えますと、私は十五年ほど前に日本女子大学を卒業したある学生から、この夏、信州の山荘で暑中見舞を受け取りました。そのなかに「自分の在学中、演習の時間、先生がたいへんな熱意をもって、その頃研究しておられた保育史の話をされたが、あれは自分の学生時代の一番強い思い出だ」という趣旨のことが書かれていました。その頃、私は演習で「日本の保育史」をテーマにして、共同研究で調べてきたことを逐次学生に話していたのです。どちらかというと女子学生から敬遠される私は、卒業生から便りをもらうということはあまりないのですが、それにしても、自分が熱中していたあの頃の私の気持ちは学生の心にも感銘を与えていたのかと思い、私は谷川の水がせせらぐ音と小鳥のさえずる声に包まれた山荘で、ひとり感慨に耽ったものでした。

（日本女子大学）

米国幼児教育セミナー報告書より

アメリカの幼児教育の近状

勝部真長

アメリカに幼稚園教育が盛んになりだしたのは十九世紀末だという。日本の幼稚園の最初は明治九年（一八七六）のお茶の水幼稚園であるから、アメリカも日本も、大体その初まりは同時代であったらしい。今から約百年前の頃とみてよい。アメリカの幼稚園もフレーベルから始まった。

フレーベル（一七八二～一八五二）が Kindergarten と名づけた幼児のための特別な学校を創設したのは、彼の郷里チューリンギアのブランデンブルグの山村において一八四〇年頃のことであった。それから十年間に沢山のキンダーガルテンが建てられたが、プロシャ文部省は、一八五一年にこれを禁止処分にして、弾圧した。解禁されたのはフレーベルが死んだ翌年のことである。エレノア・ヘールヴァルトが国際幼稚園協会をつくったのが一八五四年のことで、英国のミカリエス夫人がフレーベル協会をつくったのが一八七四年である。

アメリカに幼稚園教育を持込んだのはフェリックス・アドラーとエミリー・ハンチントンらであるが、教育理論としてフレーベル思想を定着させたのはジョン・デュウイで、彼が一九〇〇年に Elementary School Record を発刊した時である。

日本にフレーベル思想を持込んだのは大正六年頃、倉橋惣三がお茶の水幼稚園で実践し、東京女高師の講義にそれを展開してからである。フレーベルの考え方では、「教育とは対立するものを和解させることにある」という句の示すように、一人の人間の中にある矛盾対立する要素を和解させ、調和させるところに教育とか教養というもの、意味があるのである。フレーベルには、彼の師のペスタロッチがそうであったと同じ様に、敬虔な宗教感情がその人柄に深く浸透していた。すべての物的なものは、神の創造

的意志の現われであるという見方は彼には常に抜きがたくつきまとった。と同時に十九世紀はダーウィンの進化論に大きく影響された時代である。フレーベルも「人生は進化の過程である」といい、「教育は、広義において、進化の過程における積極的な醗酵の要素たるべきである」といった。しかも教育の目的は「調和ある人柄」を作るにあり、それは「有機的な統一体」としての「神と共にある宇宙」を構成する「小宇宙」であるのである。

このようなキリスト教的宗教感情は、今度訪れたアメリカのどの幼稚園にも保育所にも感じ取られたし、それの濃淡深浅はあっても、園長はじめ保育者や職員の中に、キリスト教の何らかの信仰が秘められてあるのを私は感じた。つまりどこかシーンとした静けさ、落着きのようなものが学園の空気を支配している。これが日本の幼稚園には欠けているように思う。いつもザワザワと騒がしい、俗っぽい雰囲気しか日本の幼稚園にはない。キリスト教か仏教系のミッションの幼稚園は別として、一般の幼稚園には一貫した静けさ、落着き、敬虔さが欠けているように思われる。

バークレーの大学附属児童研究所

ここの玄関にこの人間発達研究所の創設者のハロルド・E・ジョーンズ博士の写真が掲げてある。二十五歳の若さで死んだというから天才的な人物だったのであろう。受付で参観者心得ともいうべき一枚の紙を渡される。

「参観者は絶体の沈黙を守るべきこと。子どが遊ぶのを見学してもよいが、クスクス笑いや声をたて、笑ったりしてはいけない。幼稚園の中に入っても、なるべくあなた自身を目立ぬように注意すること。①庭や教室の中に入らずに、外枠の周辺を歩くこと。②突っ立っていないで、小さい椅子に腰かけていること。子どもの使う椅子を邪魔せぬように。③子どもが質問したら快く答えなさい。しかし、それ以上発展しないような答え方で。何をしていますかと聞かれたら、書きものをしていると答えて下さい。園についての質問は、見学の後に教頭に聞くこと。一般の教師は忙しくて一々ご返事できかねます。協力して参加している父兄もまた教頭の許可なしにご返事はできません。この研究所で観察したことは、他所では口外は無用です。子どもやその行為についての論議は、あなたの教室以外ではしないでください。

ここに敬虔な静けさ、シーンとした落着きが表明されている。この厳粛さがすべての教育の前提であり、この静けさはわが国の禅寺や僧院にみられるものであるが、残念ながら日本の学校、幼稚園には欠けているものである。

見学の後、われわれは一室に集まって教頭のハンナ・チン・サンダース女史と一問一答を行った。女史は中国系の人で、米人と結婚している。

問　どういう人間に育てたいとお考えですか。

答　何でも自分で出来るように、自信のある子どもに、そして思いやりのある、社会的に協力できて、金や物にひかれない人間、子どもに自信をつけてやるのが大切。社会性の発達と技能と情緒。そして自分が誰であるか（自己同一性・identity）を把握させてやること。

問　どういう時に叱りますか。

答　他の子どもをいじめたり、家財道具をこわしたり、乱暴する時、他の子の遊びを邪魔したりする時、叱るというよりもその子の注意を他にそらし、向きを変えてやる。つまり保育は、子どもが伸びて行くのに、一人一人に必要なポイント（要点・急所）を指導してやることです。（これ即ち倉橋先生の誘導保育の理論と同じことなり）

問　一斉保育はやりませんか。

答　一斉保育はやらぬが、終りの三十分前に片付けをやらせ、グループ毎に本を読んで聞かせ、じっと静かにしていられるようにパズルをやったりして仕向ける。

問　先生たちの研修は。

答　毎日、終ったあとで、十五分間、その日の保育の問題点を話し合う。そして一週間に一度、全教師の話し合いを持つ。

問　モンテッソーリをどう思いますか。

答　モンテッソーリだけでは今日やっていけない。精神分析のフロイドやピアジェやフレーベルもデューイもブルーナーも、皆大事です。今やアメリカの教育システムは全部やり直すべき時に来ている。今のシステムでは小学校三年までしか有効でない。この学園では両親教育を併用している。今の親たちは子どもの育て方を知らない。週一回、夜、両親教育の会をもち、勉強してもらっている。子どもの性的早熟のために、今はその速さに学校教育も家庭教育も対応できなくなっている。

問　心身障害児を入れますか。

答　今はいないが前にいた。障害児、遅進児を何程か入れることは、今日アメリカの傾向となっている。難聴児か不自由児を一人か二人、入れなければならないと米国では考えるのが一般化している。I・Qそのものは疑われてきている。（女史は私に「人間発達研究―H・E・ジョーンズ論文・講演集より―」という本を持って来て下さった。）

ビネー・モンテッソーリ・スクール

（サンフランシスコ・サクラメント街三五七〇番地、校長エベリン・D・ビネー女史、副校長ダニエル・J・ビネー氏）

子どもたちが帰った直後、午後四時に来てほしいという約束に従って、われわれが訪れたのは午後四時であった。ビネー女史の父親が創設者だそうで、女史の夫のダニエル氏が案内説明してくれた。モンテッソーリ方式をとる学園はサンフランシスコ地域だけでも六つぐらいある。シカゴには幼稚園から高校まで一貫してモンテッソーリ方式で経営している学園があるということである。

そもそもモンテッソーリとは何か私は日本を出る時、多少調べてメモにしてきていた。

マリア・モンテッソーリ（一八七〇～一九五二）はローマ大学医学部で女性で最初に博士号をうけた人である。女医として精神障害の子どもを診察しているうち、教育よりも医学の問題として考え、普通児と障害児とを区別しないで接続して考えようとした最初の人である。彼女も子どものI・Qには疑いを抱いた。彼女はやがて大学に再入学し、人間学的教育学と実験心理学とを勉強した。しかし彼女は現代の心理学がはたして有効性があるかどうかを疑っている。彼女の考案した障害児教育の方法や遊具――これを大々的に実験に移す機会は一九〇六年（明治三十九年）にやってきた。ローマの富豪のエドワード・タラモ氏が金を出して「仔鹿の家」を作ってくれたからである。

マリア・モンテッソーリはカトリック信者であり、民主主義者であり（つまり、イタリアのファシズム・ムッソリーニに反対）、医学者として科学の立場に立つものである。従って彼女はプラグマチズム（デューイのような）にはなれず、また自然主義者にもなれなかった。彼女は自分の立場を Spiritual Realism（精神的実在論）と呼んだ。

「子どもにとって第一の問題は、彼を取りまく直接の環境に適応できるということである」従って、「教師は子どもとその環境に対してよき観察者としての立場をとれる人でなければならない。これまでの学校教育が利用していた子ども同志の「競争心」や「褒賞」と「罰」との感情刺激などは、もう必要ないのである。モンテッソーリは子ども一人一人の個人的心理よりも社会性をより重視した。モンテッソーリ方式はヨーロッパ各地に拡がったが、一九三五にナチス・ドイツはドイツ・モンテッソーリ協会を解散せしめ、翌一九三六年にはイタリア政府もモンテッソーリ学校を禁止した。自由発展の教育理論は、時の権威に抗うものとみ

なされたのであろう。マリアは亡命の旅に登り、米国・インド・オランダ・英国を廻って講演をして歩き、いよいよ彼女の名声は世界的なものとなった。

さてビネー氏の説明を聞こう。

「第一に、子どもはからだで覚えるという事です。すべての知識は、触ったり、舌でなめたり、耳で聞いたり、身体感覚を通して得られるという事。第二に、すべての子どもには個人差があり、早く進む子と遅い子と、いろいろあるという事。（この学園では二歳から五歳までを扱い、教師と助手とで二十四名一クラスをみている）。教師の心得としては、①一時・一物主義で、一時に一つの物しか見せてはいけない。②目的は覚えさせることでなく、よく見せること、紹介することである。③赤チャン用語を使わず、正確に語ること。たとえば楕円はダエンという。オブジェ（対象）を正しく表現すること。④これらの遊具で、子どもは「秩序」「順序」の感覚をつかむ。ものごとにはすべて順序があるということ。深さ、浅さ、高さ、低さ、その順序に従わなければ物の収まりがつかないことを体験によって知る。⑤くり返しなさい。そうすればきっとうまくいく。

モンテッソーリ方式で重要なのは、子どもの指先の感覚の錬磨であり、手首の筋肉の運動にある。豆を容器から容器へ移す運動など。（この点、昔の日本のおはじき・お手玉、綾とり遊びは、そのままモンテッソーリ方式に適していた。）目と手と指の運動。字を指先で覚え、文字盤の色の違いから、物の差に気づいてゆく。すべて「リアルなことから抽象的な世界へ」、「量から象徴へ」という子どもの心の動きを見つめて、これらの遊具は生きてくる。

フレーベル方式ではおとぎ話を読んで聞かせてやる間に、幻想の世界から抽象の世界へと子どもを導くのであったが、モンテッソーリでは即物的に、物から物へと感覚を走らせる中でアブストラクトな世界が浮んでくる仕掛けである。

スタンフォード大学・ビングナースリースクール

スタンフォード大学はアメリカの私立大学の中でも最も財団の基礎のしっかりした贅沢な大学で、そのキャンパスの広大で裕福なことは知られているが、その附属幼稚園であるこのビングナースリースクールもまた広々とした三つの教室、それぞれの庭園の広々して、丘あり、谷あり豊かな自然環境をもつこと、まず狭小な日本から来た訪問者の度胆を抜く。

二歳半から五歳までの子ども、三十六人を一教室に収容して四

人ないし五人の教師が世話をする。

ミス・エーレンライヒが案内してくれて、ここはバークレイの附属と違って、自由に歩き廻ってよいし、写真をとってよいし、子どもに話しかけてもよいと大そう寛大であった。尤も自然環境、生活空間がケタ違いに大きいため、こせこせした人間の動きなど規制しなくとも、自然の広大さの中に吸収されてしまって、気にならなくなるのである。子どもが庭の木に木登りしている。そういえばバークレーの附属でも庭の木の根っこに踏み台があって登りやすいようにしてあった。モンテッソーリも「木登り」を奨励し、子どもに大切な事の一つに数えている。（日本の幼稚園で木登りを奨励しているところがあるだろうか。みな事勿れ主義、安全第一主義で逃げているのでないか。）庭の一部で、高い台から子どもに飛び降りをやらせ、その下のマットでデングリ返しをする訓練をやっている。中年の男の人がつき添って、事故のないよう面倒をみている。幼児にとっては勇気と決断を要する大仕事らしく、緊張そのものの顔付きである。

「あの男の人は先生ですか」

「イエ、父兄です。ここでは父兄が協力して、保育を手伝うことができるのです」

わが国にもこのシステムは取り入れなければならない。しかし文部省が何というか、また反対することだろう。

見学を切り上げてわれわれは一室でお茶とクッキーをよばれながら、園長のエヂス・ドウレイ博士の話を伺った。この女史がまた仏様のような円満具足の相好で、慈眼にみちている。もっともこんな天国か極楽のような学園に暮していれば誰だって人相も良くなるというものである。

問　この学校は設備もよく、豊富で、贅沢にできているが、物を与えすぎるということになりませんか。

答　これ位の設備で物を与えすぎるとは思わない。同じ玩具がダブっては置いていない。カリフォルニヤは四季の変化がなく、冬も雪がないので、子どもに想像力をもたせるよう工夫している。船・飛行機・電車・花々・色彩や、音響効果、走り方の設計にも工夫し、子どもが自由に振舞えて、馳けたり登ったり、発見したり、冒険したり、試したり、たとえここでは失敗しても構わないが、要するに子どもが幸せになれるための実験のくり返しのできる状況を作っておいてやるのです。

問　モンテッソーリについてどうお考えですか。

答　あれはオーエンみたいなものです。（ロバート・オーエンというのは、エンゲルスの書いた「空想から科学へ」の本に出て

くる人物で、結局、それは過去のものだという意味）その当時としてはあれで良かった。今はもう古くて、モンテッソーリだけではやっていけない。

問　モンテッソーリに代るものは誰ですか。

答　やはりピアジェでしょうね。それとローレンツ・コールベルク。とにかく子どもの情緒の発展を重視し、思いやりのある子どもにし、すべてに積極的に興味を抱き、意欲的になってくれることが大切です。現在三百人の子どもを収容してますが、なお五百人の子どもがリストに名前をのせて待っているのです。

私はこのドウレイ女史に感服した。ここの建物設備の立派さよりも、園長の学殖の深さに感服した。モンテッソーリをロバート・オーエンになぞらえて位置づけてしまうその見識に感じた。やはり保育は保育者の人生観にかかってくる。倉橋先生の言われた通りである。保育する者の人生観、哲学、そして社会思想。これが最後には物を言う。この女史は社会科学も心得ており、エンゲルスが空想的社会主義者と規定したロバート・オーエンの名を引いて、モンテッソーリの位置づけを試みたのである。

ロスアンゼルス・リーグ託児所

これは私立の財団による託児所で零歳から二歳までの幼児を世話しているが、黒人の十代の未婚の母などが多く、その母親の教育も同時にしなければならないということであった。中西さんという日系青年が職員の一人で説明してくれたが、若いのに落着いた人で、静かで素朴な人柄が滲み出ている。こういう人がこの社会奉仕の仕事に献身しているのだと思うと感動を覚える。旧館の隣に新館が建築中で、この建築現場を案内してもらった。著名な設計家の手になるというこの託児所は、機能的にいくつもの房に分れ、四十種の色彩で染め分けられ、各部屋に日光が入り、そして幼児たちが健康に生育しつつ、理想的に教育されるという仕組みになっている。

サンタモニカ・太洋公園児童館

これも私立だが二歳から五歳までと、五歳から十二歳までとの、大体片親の子どもを扱っている。今はサマースクールで数が少ないが、普通は九十人の子どもに十三人の教師、それに老人のヴォランティアとカリフォルニア大学の学生の助手が手伝う。こ

こは子どもだけでなく、家族ぐるみの面倒をみる。入る前にはソシアル・ワーカーや看護婦も立ち会って、身心ともに徹底的に検査する。

親は低所得者層で、精神的、経済的に危機に面しており、毎週水曜の夜に会合をもって、相談にのり、苦労を分ち合う。木曜には親と子とのバレーをやったり、週末にはキャンプに行ったりもする。十五人で一グループを作り、教師一人ついて、プログラムを立てる。とにかく家族的というよりは、各家族を団結させて人生を送れるように仕向けている。

カリフォルニア大学・教育学部・高西助教授

以上の二つの施設は、実はカリフォルニア大学の教育学部とコネがあり、両者は協力して仕事をすすめ、大学の学生も手伝い、実習にゆき、密接な関係にある。この施設をわれわれに紹介して下さったのはルビー高西博士であった。

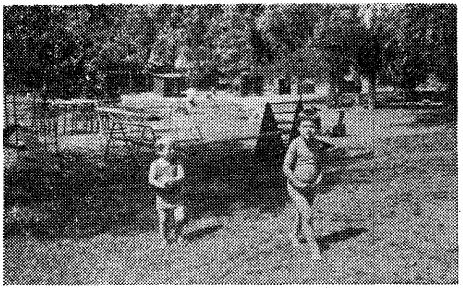
ルビー高西博士はハワイ生まれの日系三世で、スタンフォード大学で学位をえられ、現在カリフォルニア大学の助教授で、アジア各国のカリキュラムの比較研究に取組んでいられる。来年、それに関する大きい本が出版される予定とのことであった。ルビー女史はまだ三十前。一見して日本美人だが、アメリカ人と結婚していて、大きな研究室をもって活躍している。日系人がこういう知的分野に進出しているのを見るのは頼もしい。私はバークレーの研究所のチン女史の言ったことを思い出した。「アメリカはおとな中心の社会で、子どもはつけたりですが、日本は子ども中心の社会で、子どもの教育には熱心すぎる位、熱心です」と。おそらく高西家もハワイで、子ども中心に暮し、ルビーさんの教育に力を入れたのであろう。それが成功して今や若くして助教授の椅子を占めている。

広い演習室を使ってわれわれはルビーさんとの話合いを長時間もった。そして三時すぎムーア館（教育学部）の前のパチオ（中庭）で樹の蔭で、ジュースとクッキーでお茶の時間をもった。ルビーさんが家で焼いてきたというクッキーである。そこに教育学部の先生方も五、六名出てこられてわれわれの立ち話に参加された。すべてルビーさんの心尽しによるものである。

私はルビーさんとの対話の中で聞いた「アメリカにはもうフロンティアはなくなった」という言葉を印象にとどめた。もう開拓者精神は外部ではなく、内部に、内攻的にしか発揮できないのである。サンフランシスコでもロスでも、郊外に伸びた住宅街は、マッチ箱のような建売住宅や角栄団地にそっくりであり、しかもモ

ルタルの四軒長屋までさえある。この現実は、アメリカの西部開拓劇が過去のものであり、太平洋をこえて日本に来ても、沖縄に来ても、ベトナムに来ても、もはやアメリカの入りこむ余地はないのであり、アメリカは新しい次元に生きる外はないことを示すものであろう。もしそうなら、教育もまた今までと違った新しい型の人間を造らねばならず、アメリカがフロンティアを求めて発展をつづけた時代の哲学、プラグマチズムによるデュウイの教育論なども既に過去のものとなり、アメリカは教育システムを新しく作りかえなければならないと言ったチン女史の言葉は正しい。アメリカで起った事は、十年して日本に伝わってくる。日本もまた新しい型の人間の教育を、戦後三十年にして、考え直さねばならない時に直面しているのである。

スタンフォード附属大学幼稚園



◀アメリカの園児

▶順番に飛び下り

「それぞれの子どもらしさを求めて」より（五）

名古屋市立大高幼稚園

バレー教室

やえ子・よしみのふたりが、遊戯室でバレーボールをしていた。教師をみると

「先生、バレー教室の先生になって？」

というのでバレー教室の先生になってしばらくいっしょに遊ぶ。

「きょうのバレーの練習はこれでおわります。またあすやりましょう」

といってままごとコーナーへいった。ままごとコーナーで食事をしているとやえ子が

「こちらに磯川先生はいらっしゃいませんか？　もうバレー教室が始まるんですけど」

といって呼びにきてくれた。そして

「先生新しい生徒ですけれど、ご紹介します。きみえさんというのです」

といってやえ子がきみえを紹介してくれた。

「じゃーバレー教室へいきましょう」

といって、ままごとの家を出た。やえ子ときみえは、バレー教室が休憩になってから、小鳥と遊んでいたよしみを誘いにいった。

「よしみちゃんバレー教室が始まるからいくわよ」

と誘ったがよしみは小鳥と遊ぶことがおもしろくなったのか動かない。

きみえが、〝いかなければいけない〟と強くいったので泣き出してしまった。教師が

「よしみちゃんは、今小鳥さんと遊びたいんだって」

といって、そのままよしみをおいてバレーボールごっこを始めた。バレー教室がおわると、やえ子・きみえが教師のあとを追ってきて、

「よしみちゃんは長野へ行ってるもんですから、当分の間バレー教室を休みます。ずっとできませんのでよろしく」

といい出した。よしみが小鳥とあそんでい

る状態をこのように表現する。そしてバレー教室によしみがもどってきた時、いつでもうけ入れてあげられる姿勢であることがうかがえる。しばらくしてよしみがやってきた。

「あらよしみちゃん、長野からお帰りですか」

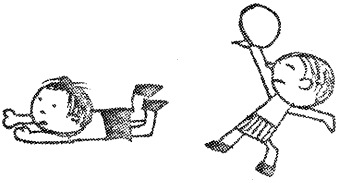
とやえ子が声をかけた。しかしよしみは自分が長野へいったことになっているということはしらないので、きょとんとした顔で

「お花の仕事してたの」という。

◇　◇　◇

〝バレー教室が始まります〟といわれて教師がいかざるを得ないようにした、そのかかわり方のうまさにおどろいた。また、やえ子・きみえとよしえの、なんともいえないほほえましい暖かみのあるトンチンカンな会話に、教師ひとりおかしさをこらえる。

（五歳児　六月十八日）



魚とわに

絵本の付録をみつけて、けんた・ちから・あかね・かなの四人が、ぱくぱく口があくような魚を作った。少しおくれて登園してきたまさきが

「先生、けんたちゃんやちから君の作っているのなに？　どこにあるの？　ぼくもちょうだい。ねえ」

といってきた。

「あれは絵本の付録で四つしかないの」

といっても納得がいかないらしく、いつまでも教師のあとを追いかけてくるので切れ端の紙で作ってやる。喜んでそれを持ち歩いて遊んでいた。

しばらくすると

「もうひとつ作って」

といってきた。

「えっ、まだいるの？」

「だってぱくぱくして、戦わせるんだもん目や口は自分がかくからね」

という。切れ端の紙でもうひとつ作ってやると、満足した顔で

「ありがとね」

といい行ってしまった。かたづけの時、

「ぼくね、ふたつあったんだけど、ひとつひさおくんにあげたよ」

といってきた。

◇　◇　◇

教師にたのんでせっかくふたつ作ってもらい、自分で目鼻をかきたのしんでいたのに、ひとにやってしまうとはと教師は思った。しかし、自分でじゅうぶん遊んだあとだから、友だちがほしいといえば、素直な気持ちであげることができたのだろう。

〝もうひとつ作って〟といってきたとき、〝ひとつにしておきなさい〟と拒否しなくてよかったと思った。このようすをみていたせきおが、〝先生、ぼくわにがほしい。作って〟といってきた。せきおが教師に自分の欲求をことばで、こんなにはっきりいってきたことがなかったのでうれしくなった。同じ紙がなかったので、色紙で作ってやる。せきおはわにだと思っているので、教師の作った魚の口をあんぐりあけて、ぎざぎざの歯をつけていた。同じものをみても、子どもそれぞれにイメージがことなり自分のイメージのように作ったりつけ加えたりしている。概念にとらわれない柔軟な思考力・想像力をもっているこの時期を、大切にし創造の世界を広くしてやりたいものである。

（五歳児　六月十九日）

色もようのついた靴

はな子が教師のそばにきて、小さい声で

「わたし、新しい靴はいてきたよ」

といいながら靴をみせた。

「そう大事にしなくてはね。きょう、いさお君も新しい大きい靴をはいてきたの。いっしょね」

「いさお君、はな子ちゃんもきょうから新しい靴なんですって、見せてあげて」

ふたりで見せ合い、色やもようなどを比べていた。降園の身仕度をしている時、またその靴を教師に見せにきた。

「お花のもようだ」

という。

◇　◇　◇

どうして、はな子が再び靴をみせにきたのだろうか？

〝お花のもようだよ〟

ということばを聞いて、はっと思った。

はな子は、きれいな花がついている靴であることを、認めてほしい、教師にも共感してほしいという気持ちで二度も見せにきたということに気づいた。

〝きれいな花の もようの ついているすてきな靴ね〟

ということばを、先にいってやるべきだったと反省した。つい教師のことばはお説教になってしまう。

〝そう、だいじにしなくては……〟とか〝よごれないように……〟とかいってしまう。

（五歳児　六月二十一日）

子ども学のはじまり

津守　真

思いがけないときに、子どもに背中をたたかれたり、声をかけられて、そこから、子どもの世界にひきこまれ、子どもと私との間に新しい世界が開かれて、子どもの世界が私の前にあらわれてくることを、私はしばしば経験してきた。

その日は、久しぶりで幼稚園の子どもたちのところにゆくので、数日前から、この次にいくときにはどんな態度でいったらよいのか、不安を感じていた。そのときの未来は、不安の色彩をもったまま継続していた。砂場に出てもその状態はつづいていて、私はどこに位置してよいかわからなかった。じきに、Aが私の後から背中をどんと押した。思っていなかったときに、思っていなかったほど強く押されて、私は驚き、Aの笑顔とともに、この瞬間に、それまでとは異質な時間がはじまったことに、そのとき、自分自身で気が付いた。

考えてみると、私が子どもからいろいろのことを学ぶのは、いつもこうして始まっている。こういうことを見たいと思って子どもの中にはいることはあるけれども、たいがい、それとは違う別のことを、それも、はるかに面白いことを見せてもらう。

これは、私だけのことではないようで、子どもに接する人は、多かれ少なかれ、同様の経験をもっていると考えてよいようである。子どもと遊ぶときに、ふだんとは違う安らぎを感じる人は多くいる。雨の日など、思うようにいかなくて、大さわぎした後に、気がついてみると、子どもたちがそれぞれに自分の遊びをみつけて、落着いた活気のある生活になっていることもある。これこそは、うまくいくだろうと思って出した材料が、見むきもされないで、全く違ったことがはじまることもある。おとなが考えているのとは異質な子どもの世界があることを、おとなはあるとき経験させられるのである。

子どもの世界の中にひきこまれるとき、そこでは、ひとつひとつのできごとが、おとなを直接に、そのことに結びつける。その世界は、対象として観念の中にある、輪廓をもって固定した世界とは異る。人が実感をもって子どもとふれる各瞬間は、ひとつひとつが自分自身と直接結びつく独立した瞬間である。ついつい面白くてひきずりこまれる瞬間でもあり、子どもの世界が口をあけている場所でもある。

子ども学がはじまるもうひとつの条件が

ある。それは、子どもとゆっくりと相手をする覚悟をもって、子どもの中にはいることである。自分でも、腰が落ち着かないことがあるので、こんなことをいうのは気恥ずかしいことであるけれども、そういうときには、子どものほんとうの姿が見えてこないし、楽しさが湧いてこないので、このことは、自分自身にも言いきかせておかなければならない。他の子どもからよばれたり、やむを得ない用事ができて立ち去るときには、子どもにもそのことは了解される。ほかのことに気が散って立ち去ろうとしているときには、子どもも本心を見せてくれない。やむを得ないときのほかは、自分からは立ち去らないつもりでそこにいると、面白いことが次々に起って、いつのまにか時間を過してしまう。こういうことも、数限りなくある。

「おじちゃん、おにごっこしよう」とやってくる子どもたち数人とおにごっこをしたときのことである。だれがおになのかと思っていると、最初から私がおにときまっているみたいである。「高いところに止ればつかまらないんだもん」と、みんな、ベランダの上に上りきりである。私だけが下にいて、おにである。「つかまえるぞ、おにだぞ、たべちゃうぞ」と言って、一しょにけらけら笑っていればそれでおもしろい。ときどき、追いかけて走りまわるところはおにごっこだが、あとは、一しょにたのしくいることが、そこでのすべてである。その時間は、ずい分長い。かぞえてみれば、四十分以上もたっている。けれども、一しょにたのしくいる時間はみじかく感ぜられる。気がついたときには、もう帰りの時間になっている。こういうときの子どもの世界には、前も後もないみたいだ。その瞬間のたのしさがあるだけのようである。瞬間と言っても、長い瞬間であるが。その中にいるとき、おとなも、その時の前の後を忘れる。子どもの世界って広いなあと思う。

私は、おにごっこをしていたのではなかったのだと思う。子どもと一しょに、ともにいる世界をたのしんでいたのだと思う。

帰りの時間になって、私も帰ろうとしていると、砂場のところで、男の子がきて、エプロンのポケットの中から小さな石をとり出し、「とうめいな石をみせてあげようか」と言って、そっと見せてくれる。白い石ばかりポケットの中にためている。のぞこうとすると「見ちゃだめ」と言って、ポケットを手でおさえる。帰り際のおまけに見せてくれる子どもの世界がここにもある。

子どもと一しょにたのしむ時間は、乳児の早い時期からある。子どもが笑いはじめたころ、子どもの笑いにこたえてこちらも笑うと、また子どもが笑う。顔をノートで

かくして、目だけ見えただけで、けらけら笑って喜ぶ時期もある。こういう遊びを繰返していると、際限なくつづくように思えてくる。こちらはあきても、やめないでつづけていると、笑い合いというよりも、それをこえて、共にいる存在感というようなものを感じるようになる。子どもにさそわれて、一しょに何かをやるときには、いつもこれに似た経験をする。同じ本を何度もくり返して読むとき、あるいはまた、箱を出してくれと言われて、ありたけの箱を次々に出して並べるとき等々、際限なくつづくかのように思われるが、あるところまでゆくと、子どもは自分からやめて、ふっと立ち去り、自分の遊びを見つけて、遊びはじめる。そういうときの子どもの遊びは、本格的にとりくむ、創造的、かつ、想像的な遊びである。そこには子どもの本心があからさまにあらわれる。そこではもはや、おとなが手を出す必要はなく、遊びの中に子どもの心の姿を見て、たのしんでいられる。さまざまにくりひろげられる、こういうときの遊びは、実に興味がつきない。

もちろん、おとなは、いつもそのすべてにつきあうわけにはいかない。いそがしいことが次々に出てくるのがおとなの生活である。だが、幼児のときのこのおもしろい遊びの傍にいられるときは、幸いな時である。自らいそがしくして立ち去る愚はしない方がよい。こうしていると、また子どもがさそってくれて、面白さが加わるときもある。

こうして、いつのまにか夜になって、子どもたちが眠ってしまったあと、床の上に散らかったものにまじって落ちている紙片を拾い上げると、その裏に、線がきのうずまきや波線、いろいろなものが描かれている。よくよくながめると、昼間の遊びがほうふつとしてくる。それは子どもの生活の中の心の軌跡である。子どもの描画は、おとなの手をへない、子ども自身の残したなまの記録である。これは、私自身の研究の原点になっている。

子どもがくりひろげて見せてくれる、こうしたさまざまの遊びの姿から、その奥にある子どもの世界のことを考えるのは、子ども学の最もたのしい部分である。そのときには、子どもの世界は、おとなである私自身の世界と異質なものではなく、おとな自身の心の中にもある。何か共通なものを探究する作業になっている。子どものことを考えることは、自分の心をひろげることにもなっている。

知恵おくれの幼児のように、ことばを使うことをせず、触覚や運動感覚、臭覚のような原始的な感覚に多く頼っていると思われる子どもと遊ぶときには、人間の最も原初的な心の状態にふれるように思う。洋服を脱ぎ、パンツまでぬいでとびはねる子ど

も、――無理にはかせようとすれば、かみつかれるほどいやがることもある。おもちゃ箱を全部ひっくりかえして、その中からたったひとつのものを探し出してあそびはじめる子ども、――あっというまもなく、おもちゃ箱を全部ひっくりかえしている。白いごはん、白い豆腐、卵の白みなど、白いものしか食べない子ども――無理にたべさせようとすれば、口の中から出してしまう。そんなにまで、あることに執着し、欲し、いやがるのは、何かその子にとってだいじなことがあるのだろうと思う。知恵のおくれた子どもを、外につれてゆくとき、恥ずかしい思いをしないように、特別に口やかましくなり、社会の基準に合うように、子どもへの要求が多くなる母親を見るとき、そしてだれに会っても、要請のみ多く、自分のできることを一しょに喜んでつき会ってくれるひとの少ないこの子どもが、外向きの衣服をすべて投げ捨てようとする気持もわかるような気がする。この子も、ゆっくりと楽しんでつき合っているうちに、衣服に対する意味が次第にかわってくるのを見ることができる。一見、奇異に見える行動が、人間の最も奥深い心の痛みのあらわれであったり、おとなだったら文学や哲学で表現するだろうような心の動きの、この子どものレベルでの具体的な表現であったりする。

クラス担任だったなら、もっといろいろのことがわかって面白いだろう。母親だったなら、もっと親身になって、生活全体についてわかるだろう。子どもを育てる立場になったなら、長期にわたって、その生活の内実にふれるのであるから、その資料には重みがある。そういう資料にもとづいた子ども学が、これから、もっと実ってゆくことが望まれる。それでは、そのいずれでもない立場の者が子ども学をするのは、どういうことになるだろうか。子どもの心は奥深いものであって、人によって、見せる側面を異にする。どの人も、子どもの人生の途上のあるところで、ある側面にふれるに過ぎない。だれも子どもの生活のすべてを知ることはできない。心を開いて、ゆっくりと子どもと交わるとき、その人と、子どもは存在をわかち合うのであると思う。一回限りの出会い、定期的にくり返される出会い、人により、子どもにより、さまざまである。子どもが自分らしく十分に生きられるような生活をつくるのに役立つことができるときは幸いであるし、そのようなところに、観察者としてであっても、立ち会うことができるときには、心が躍る思いがする。それがどんな立場であろうと、子どもの生きた生活にふれる体験があって、その意味を考えるところに子ども学がある。その内容はさまざまに豊富であって、つきることのない興味を蔵している。

いま、新年号のことを書いているとき、幼稚園のスピーカーから運動会の音楽に合わせて、先生が整列させる声や手拍子が鳴りひびいている。小さな子どもたちが、赤や黄の帽子をかぶり、列を作って歩く。このときには、先生はいつもの先生ではなく、遊戯のお手本であり子どもの注意をひとつにむけさせるリーダーである。皆で遊戯をし、かけっこをし、順序よく並んで入退場し、それ以外の生活は認められないかのようである。帰るときには大声を出して元気な子どもをみると、これでよさそうに思う人も多いだろう。しかし、幼稚園から家に帰ったとき、たくさんの子どもが、ふだんよりぐったりして、怒りっぽく、いらいらしており、夜もねつきが悪かったりする。どうして、幼稚園のときから、こんな運動会をしなければいけないのだろうか。大きくなった子どもたちは、運動会の練習のとき、いかに納得いかずに怒られたか、その思い出もこもごも語る。そのときにまとまりをつけることだけを考えて、それ以外のことを考えなくさせるのが運動会のようである。幼稚園百年の歴史の中で、運動会はいつはじまり、どのように推移してきたのだろうか。百年たって、良い方に向っているようにも思われない。

近所の高等学校では、太鼓の音、応援のかけ声勇ましく、別の運動会をしている。チームの統制がとれて、リーダーが張り切るほど、それに乗れなくて傷つく者も多い。運動会を立派にやりとげようとするほど、子どもの生活は失われてゆくように思われる。

本年は、明治九年に東京女子師範学校に付属幼稚園が創設されて百年を迎える。本誌も、明治三十四年に創刊されて、七十五巻を迎える。子どもが喜んで生活している幼稚園が一つでも増えることを祈る。

（津守　真）

幼児の教育　第七十五巻第一号

一月号　©　定価二〇〇円

昭和五十年十二月二十五日印刷
昭和五十一年一月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。

主催　日本幼稚園協会
　　みどり会

第２回　幼児教育欧州視察団

欧州の幼児教育施設の中でも特に優れている４ケ国（イギリス，オランダ，西ドイツ，フランス）を訪れ，現況を視察しこれからの幼児教育の在り方を考えて頂く目的で企画しました。

コース　東京～ロンドン～アムステルダム～ハンブルグ～パリ～東京

期　間　昭和51年３月24日(水)～４月４日(日)　12日間

参加費用　**￥３９６,０００**

昭和50年10月１日現在の航空運賃で50名以上のグループを基準，視察諸経費，通訳代，一流ホテル宿泊代，貸切バス代，観光諸経費，食事（３食）を含みます。

視察予定先　コーラム子供センター
ポンドストリートデー保育園
教育交流会議（ロンドン）
アムステルダム市役所
幼児教育研究所（ハンブルグ）
ＩＮＲＯＰ（パリ）など

詳細パンフレットもしくは問い合わせは

東京都文京区大塚２－１－１　お茶の水女子大学付属幼稚園内
日本幼稚園協会　会長　勝部真長
みどり会　会長　山村きよ
又は指定旅行社
日本交通公社 海外旅行新宿支店
〒160 東京都新宿区西新宿１－18－８　ＴＥＬ（03）346－0182(直)
幼児教育欧州視察団係　井上・富田　（03）346－0166(代)

51年度
フレーベル館の新学期用品

★くわしくはフレーベル館代理店・支社・支店・営業所　または本社営業課　TEL東京(03)292－7781(代)にお問い合わせ下さい。